

146
281

海東著

聖僧道元

文學同志會出版

019570-000-0

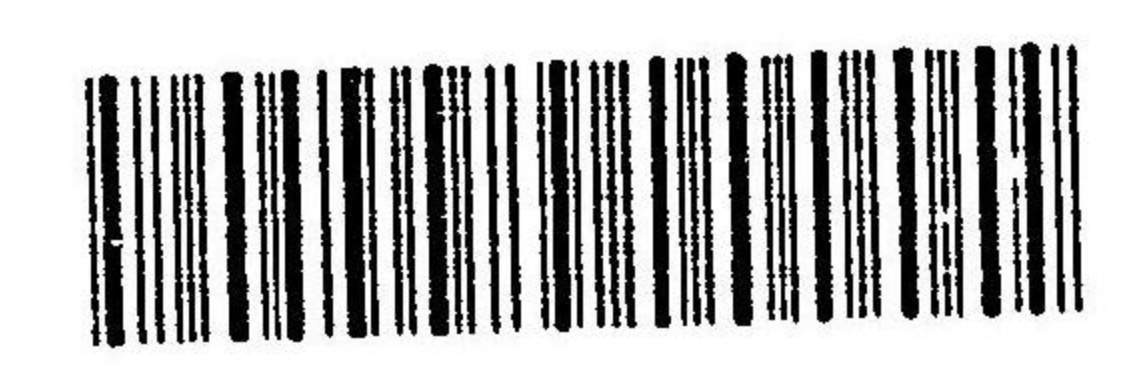
特61-38

聖僧道元

野崎 崎次郎 / 著

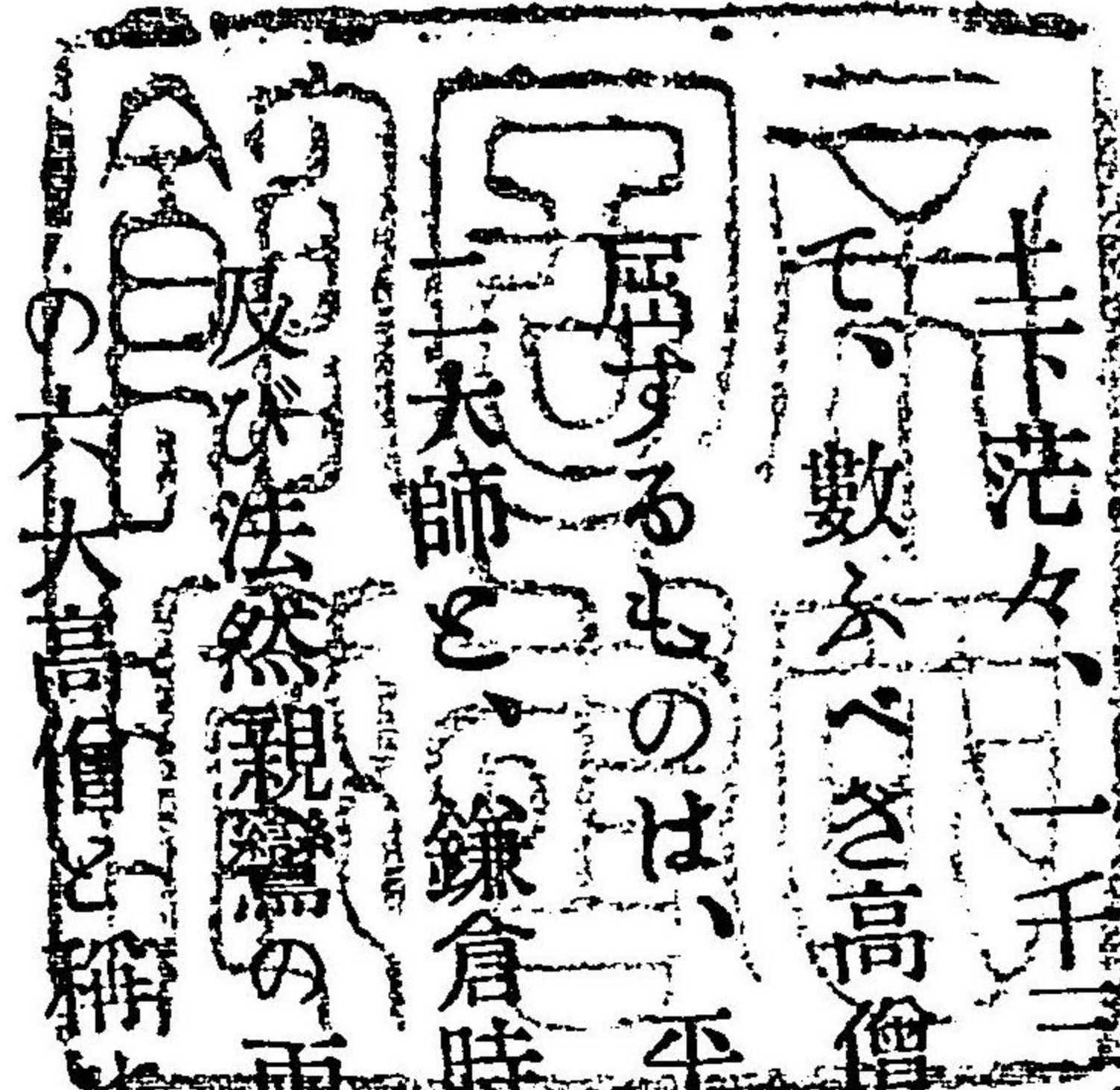
M33.4

ABG-0344



牛

聖僧道元の序



上下茫々、一千三百有餘年の日本佛教史上に於
 て、數ふべき高僧甚た多しと雖、余輩常に指を
 屬するものは、平安朝時代に於ける傳教弘法の
 二大師と、鎌倉時代に於ける榮西道元の兩禪師
 及び法然親鸞の兩上人なり、余此の六名を日本
 の六高僧と稱せんとす、余殊に諸高僧の中よ
 り此の六名を撰ひ、附するに大高僧の名を以て
 稱揚するもの、他にあらず、傳教弘法の二大師

ハ、當時奈良の舊佛教ノ弊風百出するを見て、奮然その弊習に染まず、此ノ新佛教を興して、平安朝四百年間、比叡高野の兩峰より、真如の月光を放ちて六十餘州を曜し、その餘光引て今に及ぶ、また榮西道元の兩禪師に、法然親鸞の兩上人は、當時比叡高野の山上も、漸く妖雲漠々として遮り、真如の明月も將ニ隱きあんとする狀況を目撃して、共に舊佛教の恃むに足らざるを悟り、一ハ自力門の水底を極め、一ハ他力

門の堂奥を討ね、雙方より期せずして新佛教を興し、その門流を臨濟曹洞淨土真宗の四家となりて、明治の聖代尙ほ餘香の馥郁たるものあり故に余輩この六名ヲ特ニ日本の六大高僧と稱し日本佛教史上に特筆大書して、後代にその行蹟の幾分ヲ傳へんと欲する者なり、頃ハ野崎君『聖僧道元』なる小冊を脱稿し來りて、予に序を求めらる、然るニ余課務多忙、本書を閱讀する閑をも得ざりき、さりとて余平素道元禪師其人を慕

ふこと切なるゆゑ、平常懐包する所を一言記し、
以て本書の序に代ること爾り。

明治三十三年二月十五日

文學博士 村上專精記す

目次

聖僧道元目錄

- ◎前提.....
- ◎經歷.....
 - 一 彼れの幼時.....
 - 二 出離解脫.....
 - 三 渡唐.....
 - 四 歸朝後の彼.....
- ◎彼れの生涯.....
- ◎鎌倉時代と禪宗.....
- ◎彼れの理想.....

一 無常觀……………

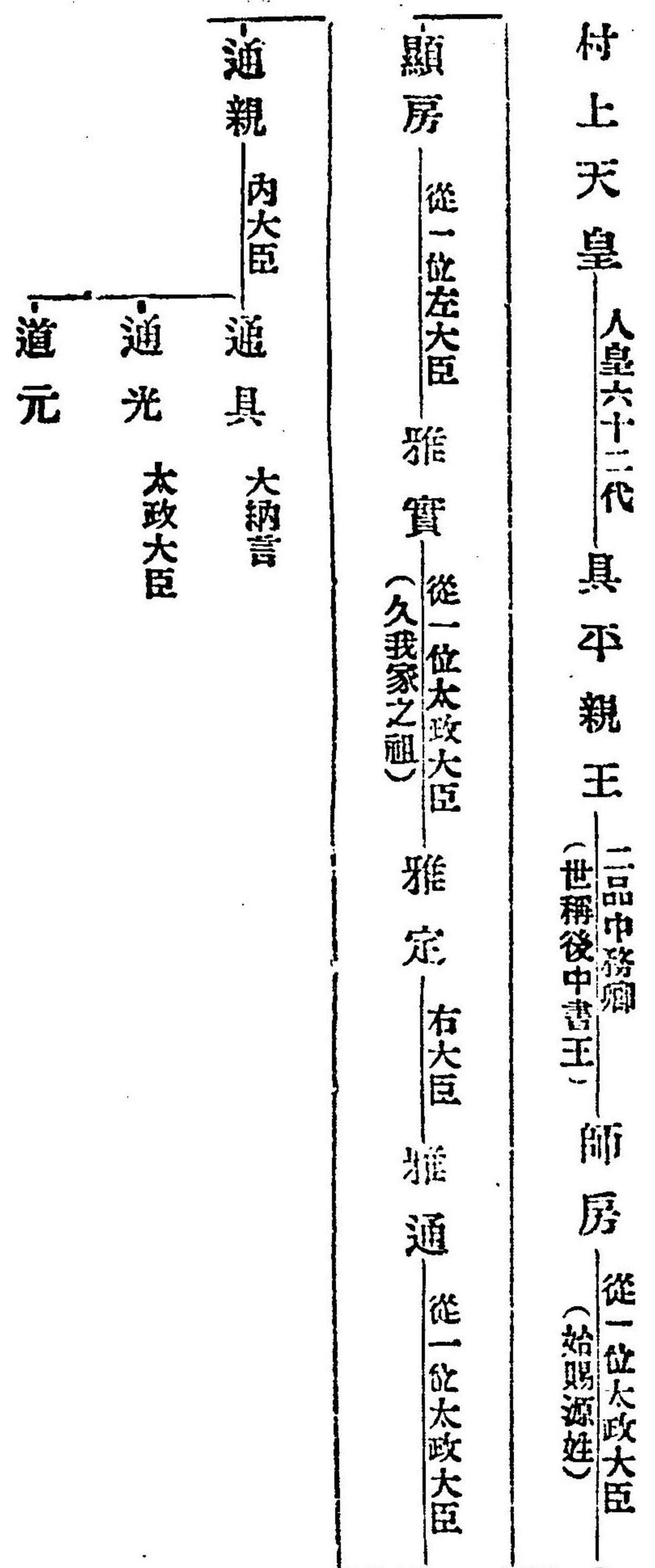
二 厭世と迷天……………

◎ 宗教家としての道元……………

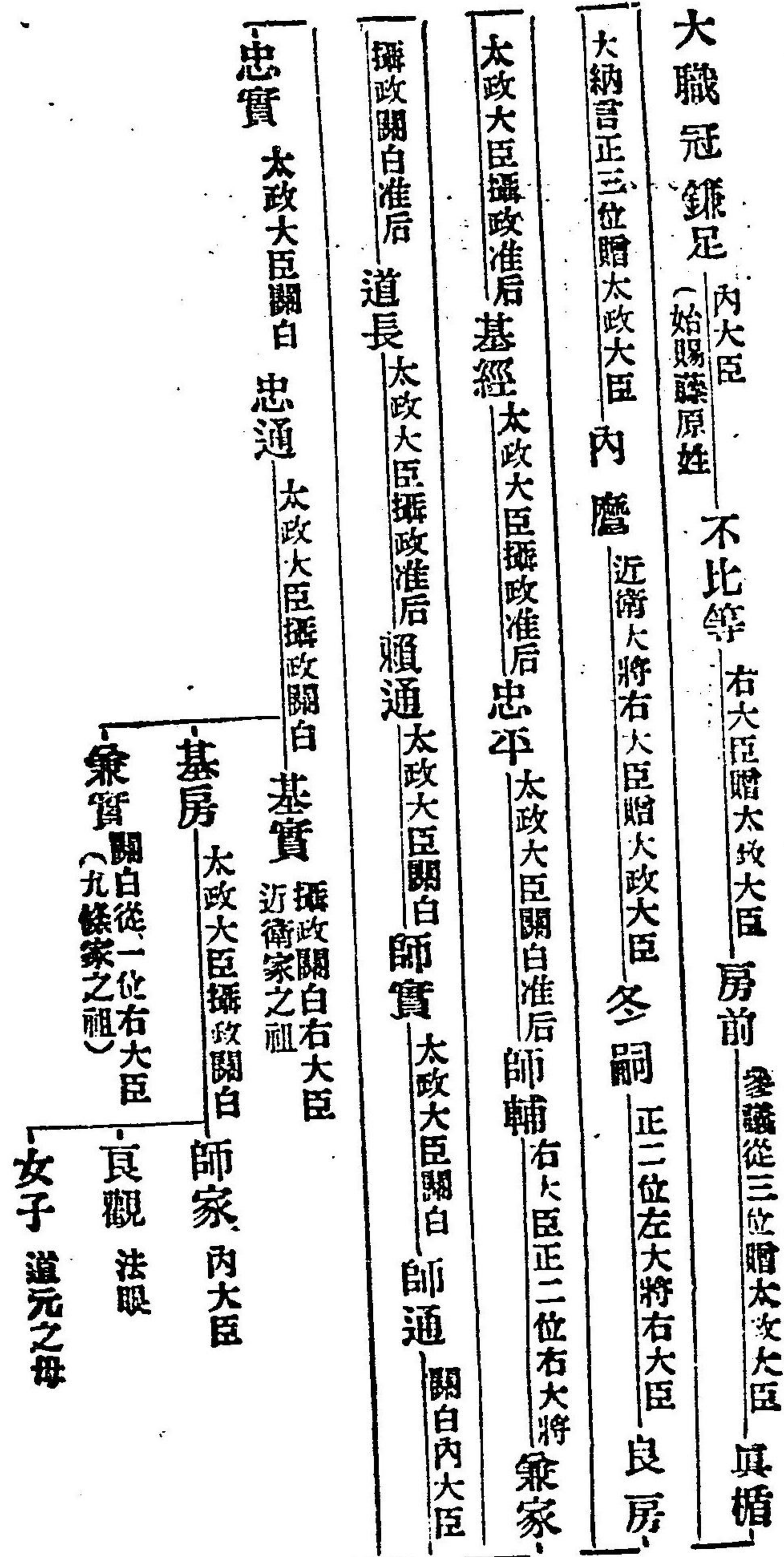
◎ 晩年と涅槃……………

目 録 終

道元系統



道元外戚系統



聖僧道元

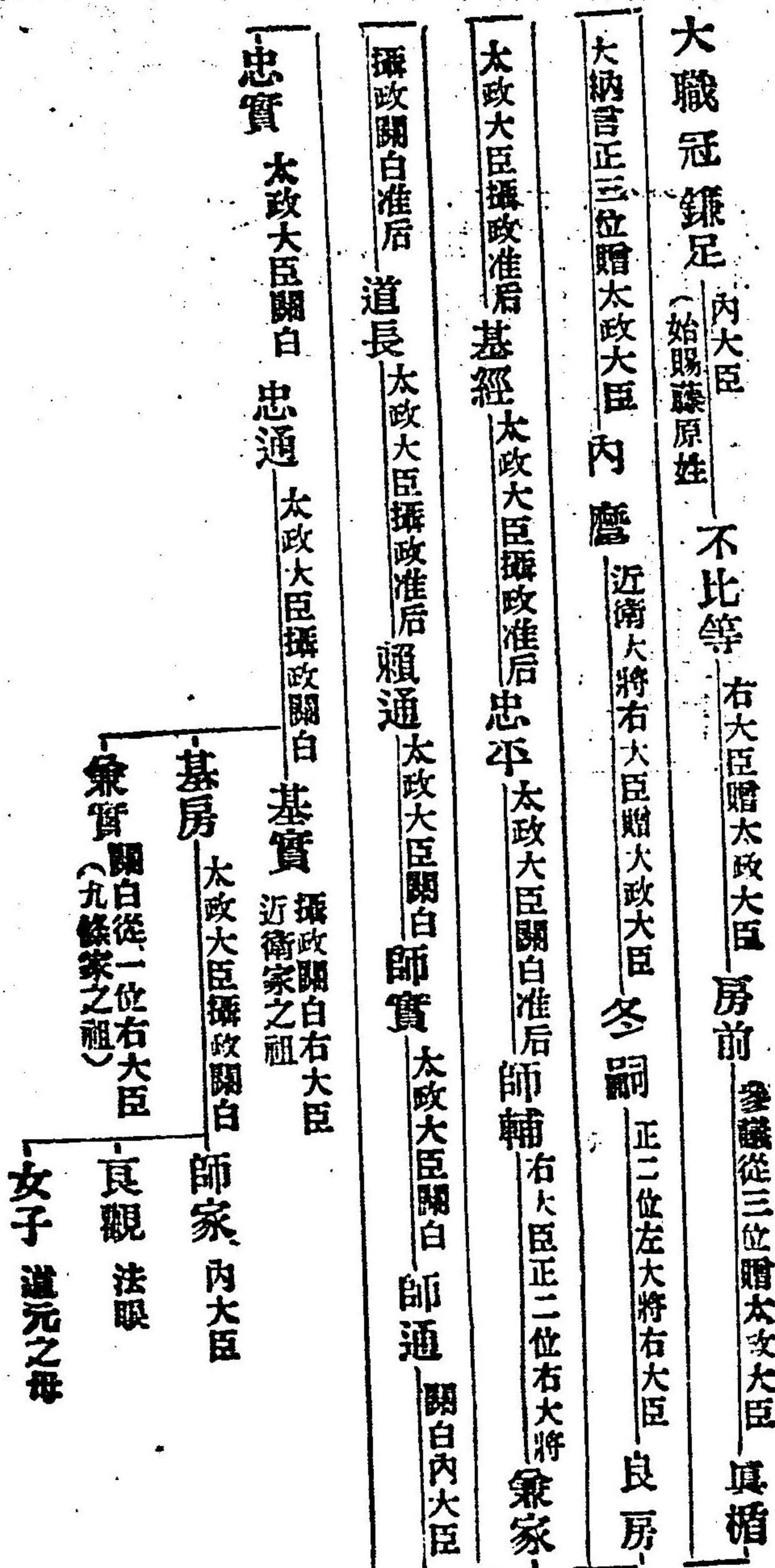
海東野崎崎次郎著

前提

瀾々洒々 大に擲す 可きもの ありなり

華麗燦爛の洛陽に 譽世の榮花を聚め 金光瑠璃の高臺
 に 人界の美福を盡し 令譽高貴の極たる 公卿育ちの
 身を以て 一たび醒覺の感に觸るゝや 決然袖を拂ひて
 紅塵執着の卷を去り 髪を断ち衣を染めて 東奔西走
 江海に遊び 山川を涉り 師を尋ね 道を訪ひ 遂に
 曹谿の路を達觀して 化儀に身を委ねたる 聖僧道元の

道元外戚系統



聖僧道元

海東野崎崎次郎著

前提

瀾々西々 大に拘すや 可きもの ありなり

華麗燦爛の洛陽に 譽世の榮花を聚め 金光瑠璃の高臺に 人界の美福を盡し 令譽高貴の極たる 公卿育ちの身を以て 一たび醒覺の感に觸るゝや 決然袖を拂ひて 衲座執着の卷を去り 髪を断ち衣を染めて 東奔西走 江海に遊び 山川を涉り 師を尋ね 道を訪ひ 遂に 曹谿の路を達觀して 化儀に身を委ねたる 聖僧道元の

我國近時の状態

二

蹤跡や 瀟々洒々大に掬す可き者あるなり

昔者言へるあり「家亂れて良妻を想ひ國亂れて賢相を想ふ」と 誰か徳義亂れて 聖賢を想はざる者あらむや 今や吾國の形勢は 上下共に歐米文化の燦然に眩感し 有形無形を問はずして 歐風に摸し 米風に倣ひ 此れを棄て 彼れを取り 國体の何者たるを知らず 建國の歴史的特点を知らず 平凡一様無意識の解を下して 自ら大和民族を輕視する者 舉國皆然るの狀態に非らずや 化學的の進歩 物理的發達に狂醉せるの風は 歐米崇拜の弊に陥りて 人倫無道の風習が胎せるあるを覺らず

歴史的神洲の殊点

滔々たる天下の形勢に非らず

歴史的神洲の創始 國体の殊点を解せざるの風は 物質的文化に遲歩たるの故を以て 國粹の精華あるを忘却せる者多く 身を鴻毛の輕きに比し 義を泰山の重きに置くの 忠君愛國的美風を棄て 仁義道德の譽を樹て 公道を踏み 正義を取るの風習を顧みずして 輕佻浮薄人を欺き世を欺き 恬として恥づる處なきは 吾國目下の風潮に非らずや 滔々たる天下の形勢に非らずや 世道人心の輕薄 公私徳義の衰頹は 今日より甚だしきはあく 沒理漢 沒道德の輩 天下に横行して巨利を貪り 無節操 破廉恥の徒 顯位を弄して榮譽を搏するの

三

幻影の勝
觸の管の
遺跡に就
て其一端
を窺はし
めよ

今日 誰か高潔彼れの如き 聖徳渠が如き生涯を 敬慕
せざる者あらむや
嗚呼敬慕す可きの道義 掬す可きの瀟洒は 高く几界に
超逸して 廣く俗界に美名の福音を傳へす 普く塵境に
赫々の高譽を樹つる能はざりしもの 蓋し彼れの能はざ
りしに非らずして 彼れの欲せざりし處あり 視よ彼れ
が現世界に於ける 奇行偉跡の深遠廣大 得て瞞睥す可
から現る者あるを 請ふ吾人をして 彼れが 幻影の勝
觸 柵管の遺跡に就て 其一端を窺はしめよ

経 歴

一 彼れの幼時

人は言ふ 深山大澤能く龍蛇を生ずるも 浮華社會に未
だ英雄豪傑の生じたる事あしど 蓋し豪の豪あるもの
聖の聖ある者に至つては 反て之に異なる所あるか 視よ
昔時歐洲に於ける大文豪スコアの生せしや 喧噪繁
華のリッププール市に於てせり ワシントンアーピング
は 渠を評して言らく 渠の生地を稱賛して曰く 自然
は出精勉強の功に依りて上達せる技藝者の枯死するを喜

聖の聖な
る者也

大文豪は口
スコーピ
の喧噪繁
リッププ
の生るに

千古の至聖道元は洛陽城中に生る

先天的の偉男子たりしなり

六
び 偶然ある機會に投合して來れる。所謂天稟の戈物を愛すと「吾朝土御門院の御宇正治二年に於て 洛陽城中而かも金殿玉樓の中に 千古の聖賢道元を生ず 父は村上天皇九代の裔久我内大臣源通親公にして 母は大織冠鎌足公の裔關白大政大臣藏原基房公の御娘ありしなり 梅檀は二葉より香ばしく 獅子兒は三歳にして能く獸王の威ありと 彼れは四歳にして 季嶠の百詠を讀み 七歳にして 毛詩左傳を讀みたりき 常人と異なる斯の如し 想ふに彼れは 到底平凡ある男子に非らずして 天稟の偉才子ありし也 先天的偉男子ありし也

寒夜の街頭に泣く慕の孤兒の涙は孤兒の泣きなり

渠は變化に大なる變化を來し永に不變の姿を見止む

彼れは渠が敬慕せる 彼れが尊愛せる 床しき彼れの母上と永久不遇の身とはありぬ 寂しき寒夜敬慕の涙に泣く孤兒とはなりぬ 彼れの母上は彼れの八歳の冬に於て 颯々たる悲風にさらはれ 早朝一滴の露と散り霜と消え 遂に北邙一片の煙とあろは化したまひぬ 斯かる一大事變に相遇せる彼れは 流石に恩愛の涙に沈みぬ 頼みすくなき孤兒として寂寥に泣きぬ 半霄遺骸に母の愛を思ふて泣きぬ 變化せる單孤の身として泣きぬ 枕上の香爐に無限の恨を消しつゝ泣きぬ 通書の讀經に感じつゝ泣きぬ 親戚朋友の會合につきて泣きぬ

渠は榮花
執着を去
つて遊天
界に遊び
並に衆生
の憂苦し
を救はせ
ん決せん

父上兄上の悲哀と共に泣きぬ 彼れは死に就ての凡てに
於て泣きぬ 泣きつゝ彼れは遂に其枕上を去る能はざり
き 泣きつゝけたる彼れは遂に死の悲哀に沈むに足らざ
るを悟りぬ

彼れは終夜形骸を見守りつゝ 千々に思を焦しつゝ枕上
に静坐して 焚きたる香煙の立ちては消え 立ちては失
せけるを見て 天地の大不可思議を感受し 忽然一縷の
靈光を見留ぬ 曰く浮世の無常ある亦是の如きか 然ら
は浮世の事 皆夢事のみ 瞬時のみ 何ぞ夢世の榮花に
執着して 塵界に美名を競ひ 俗世に虚榮を貪り 浮空

八

讀書研學
の苦み

内外の典
籍に精通
す

の利祿に迷ひ 虚事の題位を望まむやと 遂に宇宙を遠
觀して 諸行の無常ある事を觀破し 永久ある 靈光あ
るライフある事を知り 早く相對的下界を去つて 絶對
界の靈光に一致せん事を求め 併せて幾多の衆生をも此
絶對界靈光の甘露に浴せしめむとの大悲願心を發しぬ
是れより彼れは 小供心に智見の力の大に 此願心を助
くるものあるを知り 日夜讀書に思を焦し 螢雪に餘念
なく 日に勵み 月に學び 彼れが九歳の時よりは世親
菩薩の俱舍論を初め 廣く内外の典籍に精通し 勉強尙
止まず 常に思を讀書に焦してけり

九

英名の美
な開きを推
能の實を推
結びぬ

鵝は到底
長袖者流
の者たら
ざりき

巨魚は池
中の者をな
らす大國
はらずの
類にあら
ず

さらぬだに賢英ありし彼れは 讀書の偉切によりて智育
の發達をなし 見聞の功徳によりて才能の美花を開きぬ
彼れの英名は揚り 彼れの才名は傳はりぬ 彼れの一族
は喜びぬ 彼れの朋友は羨みぬ されど彼れは聊かも喜
禧の情を起さざりき たへて世の毀譽褒貶は顧みあざり
りき されば彼れは到底俗界の偉男子たる能はざりしあ
り 彼れは公卿の相續者たる久我道元たる能はざりしあ
り 彼れは一生榮花に奢り虚福を貪るの長袖者流の者た
る能はざりしなり

巨魚は池中に住まふ 大鵬は燕雀の群に遊ばずと 彼れ

は十三歳の春に於て一族室中に會して 彼れの英名を喜
び彼れの才能を楽しみ 彼れを母兄ある松殿攝政師家公
の嗣子ならしめむと議し 既往を談し將來を語り 定め
て將來の大攝政大關白あらむと元を祝し之を喜び 歡聲
湧くが如くある時 彼れの血は極めて冷やかに 彼れの
頭は極めて淡白に之を迎へぬ 彼れは之れに對して一片
の微笑をも漏らす能はざりき 彼れは悲願心の大ある一
物に對して 早く人間俗界の塵境を去り 清淨無垢の神
靈界に母の靈光を辿らむかと迄驅られぬ されば彼れが
斯かる俗塵の火宅は一日も去るあとの早からむを望み

身を白雲流水の間に蔽ふて煩惱の執着を去り心を深山の
 靜然たるに傾け 耳を幽谿の清泉に清めむとの念は彼れ
 の小胸を踵きて走りぬ 彼れが超然たる解脱心は如何か
 る方法を以てするも彼れを留めて名利の間に争はしむる
 能はざらしめ否か彼れの冷血ある惱裏は己れの名利間に
 奔勞する事を好まざりしのみならず 他人の顯位利祿に
 のみ汲々として 德義揚らす 輕佻風をみせるを見て
 是を矯めむと欲し 是れを極はむとの願念は 此會議の
 刺激を受けて益々決心の固きをみし愈々一層の期を早め
 ぬ 是れ彼れが歴世的の宗教者に非らずして 先天的宗

教家たるの所以あるか

嗚呼彼れや先天的宗教家として生を稟けたる者 何ぞ攝
 政關白の虚榮に満足する者あらむや 一族會議の決議に
 己れの意志を任せ 生來の願意を變ずる者あらむや 古
 人言ふ「事の成るは成る日に成るに非らず」と彼れの僧
 界に於ける大事業大遺跡は 實に彼れが發心出家の初日
 に於てありしなり 豈に發心出家の初日に非らずとせむ
 や

先天的宗教に於ては 生來の願意を變ずる者あらむや
 嗚呼彼れや先天的宗教家として生を稟けたる者 何ぞ攝
 政關白の虚榮に満足する者あらむや 一族會議の決議に
 己れの意志を任せ 生來の願意を變ずる者あらむや 古
 人言ふ「事の成るは成る日に成るに非らず」と彼れの僧
 界に於ける大事業大遺跡は 實に彼れが發心出家の初日
 に於てありしなり 豈に發心出家の初日に非らずとせむ
 や

一一 出離解脱

出離解脱
の機に至
り

孤影飄然
發心修行
の初旅に
立ち出で
ぬ

朦朧たる
春月に逆
旅の辛酸
を忍びぬ

法眼渠を
試むるも
心固たる
決心

詩人西行は歌ふて曰く 世の中を思へはなへてちる花の
我が身を扱てもいつちかはせん」と噫然り 渠は浮世の
無常を觀じ 鞏固ある決心を以て 早く佛門に歸し 生
死の大事を究めむとして 其機の到るを待ちけるに 彼
れをして攝政關白の嗣子たらしめむとの決議は 端なく
も 榮花を去り 令譽を捨て 光榮を去り 卿衣を棄て
し 出離解脱に向ふの 機を興へぬ
晚鳥時に急き 空の景色のいと哀に 祇園精舎の鐘の音
は 諸行無常を告ぐる時 渠は住別れし 金紫の構閣を
後にして 孤影飄然 發心修行の初旅に立ち出でぬ

朦朧たる春月に 露深き小徑を辿り 晴濛たる幽谿に
崎嶇たる山路を歩み 瀟々として逆旅の辛酸を忍ひつゝ
叡山におはす母兄 良觀法眼が許にと急きぬ
森羅萬象此處に休退して四顧寂寞 少年の胸宇を躡く者
は 彼れの耳新らしき 谿間の清泉あり 爲めに膽掉ひ
股慄き 夜の更け行くにしたがひて 程遠からぬ鐘の聲
月に和して聞ゆるを知るべとし 夜の明くる頃 叡山
に着し 事の仔細を告げぬれば 法眼事の意外に驚き
渠に向て曰く 汝は生を光榮ある公卿に稟け 身は將來
の名譽ある關白に在らずや 而も元服の慶賀は近きにあ

壯大なる
無常觀は
常に動
きはざり

りと聞く 何ぞ無味淡白の仙境に一生を送らんとすと
されど彼れの斷固たる決心 壯大なる無常觀は 到底彼
をして再び俗世の人たらしむる能はざりしなり 彼れは
答へて言へるやう 母上御臨終の御遺言もおぼろげあら
す 且つは浮世の榮花など願ふ可きに非らずと 法服發
心の賢固あるに驚き そゝろに感涙を濺きつゝ 彼れの
願意を容れ留敷を許しければ 彼れの満足は言はん方あ
く喜悅のあまり直ちに剃髮染衣を請ひたりければ頓て横
川首楞嚴院の千光房へ登せけり 其翌年(建保元年癸酉
道元十四歳)四月
九日天台の座主公圓僧正に得度を受け十日に比叡の戒壇

錫は本來
本法性天
然自性身
の疑に於
て疑問を
起せり

に於て菩薩成を受け 此處に彼れが希望の初期は満たさ
れぬ 是れより彼れは汲々吁々 廣く天台八教の道を究
め 夜を日に繼ぎて 深く秘密一乘の教理を探り 研學
怠らざりしに彼れは十五歳の時に一の疑句を發しぬ 其
は彼れが讀みたりし經文の中に於て「本來本法性天然自
性身」てふ一句に就きて疑ひを發しぬ 此れ即ち吾人の
身が行せず修する事なくして 此身即佛あるの義にして
弱年ある彼れは大に疑ひぬ 若し此身即佛あらば 三
世の諸佛を初め 吾國の高僧も行して後に佛にある可き
にやと 彼れは此大なる疑問の爲めに惑ひぬ苦しみぬ

時の名僧
三井寺の
公胤僧正
の許に
の疑句を
問ふの
意

榮西禪師
の就て
めて教
別の法
か學ぶ

然れば名僧智識によりて解を得るにはしかずも 種々の
手斷を盡して問ひたるも 當時教法普からず 僧未だ精
あらずして 容易に此惑ひを解く能はざりければ 彼れ
は當時高學の名聲高かりける 三井寺の公胤僧正の許に
到り致細に指示を乞ひたりしに 公胤頭を傾けて 此儀輒
く答へ難し建仁寺の榮西禪師に問ふ可しと 彼れは直ち
に錫を轉して榮西禪師の會裡に投じ 參學忘りあかりし
かば 豁然として此難句を解するを得たり 此に於て彼
れは天台の衣鉢を棄て、 教外別傳の禪門に改りぬ 是
れより彼れは大に學び大に究めたるも未だ其蘊奥を學得

一代禪經
の熟讀
を專玩
味する
に及ぶ
再り

ずる能はざるに 悲しひかあや 天榮西に余命を借さす

榮西は(建保三年乙亥、道元十六歳)七月五日に於て忽焉入寂の身とは

ありぬ 彼れは悲哀に悲哀を重ね 一しほ無常の感に打
たれたるも流石は生者必滅會者定離とあきらめて 大に
彼れの信厚を重ね 無常の迅速を感じては一層勉勵に急
ぎつゝ 同じく榮西の弟子明全に隨從して 念禪學の教
理に勵み 更に進みて 八万四千の經法を熟讀翫味する
事再度に及びぬ 彼れが斯く修行に勉勵學得する事 少
なからざりしも 永光ある眞如の満月を探知する事能は
ずして 苦慮鬱悶に沈みしもの蓋し時世の然らしむる處

當時僧界
の下落

あり 視よ當時吾國の佛教が徒に言名文相の懷懐のみに
 滞り 依經不會の妄論のみ多くして高尚ある哲理の何た
 るを解する者なく 蘊奧ある真如の何物を解する者なく
 何ぞ彼れが悲願の一端をも満たし得可けむや 試に當
 時僧界の有様を摘例せば 圓顛長袖音經讀誦の身を以て
 朝には王公貴人の鼻息を窺ひて威福を廟堂の上に恣に
 し 夕には宮女公娘に親近して不論の愛あからむと企て
 或は無謀の兵を動かして武人に抗し 或は僧兵を遣して
 至尊を苦しめたてまつる等 朝を汚し野を騒かし 心に
 一片の道心なく 身に甚少の律だに修せず 眞に俗より

青史に印
する處の
僧侶の汚
行

出て、俗よりも俗ある行動のみ 視よ青史に印する處
 白河上皇が天下に自由ならざる者三つ曰く鴨河の水 曰
 く雙語六の賽 曰く山法師のみと 至尊を煩しむ事り
 人を苦しめ 蒼生を土芥視せるの罪は 永世不磨の汚點
 のみある事を 何ぞ斯かる僧界に高尚ある哲理蘊奧なる
 真如の現はれ得べき 蓋し當時の僧界は 眼實發心の道
 僧に非らずして 多くは塵界の功名癡に於て競走に敗れ
 吾欲の鬭争に打勝つ能はさりし者の 世を厭ひ俗を逃
 れたる徒のみにして寺院は殆んど 野心家厭世家の 遁
 世地たる觀をみせり 何ぞ善智識を此間に求め得べきの

法心賢固
なる何れ
の處に向
て大法を
學得せむ
とすむ

學理哲理
の淵藪なる
唐土に
彼れを宿
むを遂げ
む

理ありむや 嗚呼發心賢固ある彼れは何れの處に向つて
彼れが良師を求め 眞の道業を學得せんとせしか 彼れ
はかゝる腐敗せる僧界に無念の涙に沈みつゝ遂に斃れた
るか 否亦彼れが廣大ある悲願心は 遂に彼れが幼身を
滄海たる波上一蘆の孤舟に投して 學理哲理の淵藪なる
唐土に 彼れの宿意を遂げ 彼れが生來の希望を充たさ
しめむと 茲に渡唐の發心を起さしめぬ

三 渡 唐

欽明天皇の朝百濟佛教を輸入してより 茲に數百年 正

未だ傳の教外
別傳の無
上道の能は
ざるなり

法未だ傳らず 佛法未だ弘通せず 是れが宗匠としては
聖徳太子出で 傳教空海の二傑僧渡唐して正法を傳ふと
雖も未だ不立文字教外別傳の無上道を傳ふる能はざりし
なり 鎮護國家など言へる名相の禱祈僧のみありしなり
斯かる淺薄に非らざれば 腐敗せる僧侶の中に於て眞
の善智識を求む 豈得べけむや 彼れは明らかに正法を
求むる亦正師に據らざる可からざるを知りたりき 當時
彼れは何れの處に向つて正師を求めむとせしか 彼れが
當時の胸中を徒弟に示したる一節を摘寫せば 瞭に彼れ
が當時を推知す可けん

彼れかの渡
も所至のり

我國古來
籍集書未
籍其語未
だ熟せず
して其言
是れ青し

「機は良材の如く 師は工匠に似たり 縱令良材たりと雖ども 良工を得ざれば奇麗未だ彰はれず 縱令曲木と雖ども 若し好手に遇はば妙功忽ち現ず 師の正邪に隨て悟の偽と眞と有り 之を以て曉る可し 但た我國は昔しより 正師未だ在らず 何を以て之れが然る事を知るや 言を見ひて察すべし 流れを酌て源を討ぬるが如し我朝古來の諸師の篇集書籍弟子に訓へ人天に施す 其言是れ青うして 其語未だ熟せず 未だ學地の頂きに到らず 何ぞ證階の邊に及はん 只た文言を傳へ 名字を誦せしめ 日夜他の寶を數へて自ら半

錢の分あし 古の賣め之れに有り 或は人をして心外に正覺を求めしめ 或は人をして他土の往生を願はしめ 惑亂此に起り 邪念此を職とす 縱令良藥を與ふと雖も 銷方を教へざれば病とある事毒を服するよりも甚だし 我朝古へより良藥を與ふるの人あきか如く 藥毒を銷するの師未だ在らず 是を以て生病除き難く 老死何ぞ免れむ 皆是師の咎あり 全く櫛の咎に非らず 所以はいかむ 人の師たる者の 人をして本を捨て未を透はしむるの然らしむるあり 自解未だ立たざる以前に 偏に已私の心を專にして 濫りに人

若し佛道を學ばむと欲せば、唐土の知識を訪ふ可し

渠は然るに決然唐國へ去り

をして邪境に墮つる事を招かしむ 哀む可し 師たる者未だ此の邪惑を知らずんば 弟子如何が是非を覺了せんや 哀む可し 邊鄙の小邦 佛法未だ弘通せず 正師未だ出世せず 若し無上の佛道を學はんと欲せば 遙に宋土の知識を訪ふ可し」と

是れ彼れが渡唐の意の那邊に存せしやを明らかにしてあまりあるに非らずや 彼れは當時唐土の文化燦然として觀る可く 宋朝の佛法歴然として修す可き正匠あるを聞きたりしあり 彼れは彼れが廿四歳貞應二年癸未の春二月二十一日に於て 住みおれし床しの都を後にし 恩愛の父上

天童山に留錫せり 唐僧彼れ

兄上が住はせ給へる 金輪の高閣を拜みつゝ 師僧明全に従ひて 都を出で三月下旬 春光濃あるの朝 愛國の戀情を築前博多の津に残し 幼身を波濤に任かせつゝ 大宋の嘉定十六年癸未四月の初めに 唐土明洲の湊に安着しぬ 而して船中に滞在して 諸寺諸山の風景を探る事三ヶ月餘七月に至つて 遂に天童山に掛錫せり 此時天童山には 無際了派てふ禪師の在住して多くの 靈納を説化しつゝありしあり 故に彼れは新來の日本僧として大に勉めたるあり 然るに今古同じき支那人か 自家尊大の風習は 彼れが日本僧の故を以て 賤視する事甚だ

を輕視し
て末席に
置けり

しく、彼れも明全をも、唐僧の末席に坐せしむるの、不
道なりければ、彼れの憤怒は一方ならず、宋朝に奏して
言へる様、凡そ佛法に入て戒を受けたる者は、其受戒の
順序にて坐を定むべきに、他國の人とて末席に置くは
法に非らず、敕語を以て之を正したまへてよと、奏上二
度に及びたれば、敕詔遂に天童山に下りぬ
嗚呼彼れが非凡の才ある斯く法を重んじ、國光を海外に
輝かさむとの意は、瞭々として、此の奏上の推示する處
あらずや、蓋し彼れが惱裏には、縱令四河海に入つて亦
本名を留めざる僧界たりとも、我日本てふ文字の形骸の

無差別的
平等に非
らず

天童山を
降り

經山に登
り又育王
山萬年寺
に遊ぶ巨
剎

上に附隨する以上は、平等中亦日本人てふ國家的感念の
差別の附隨せるを解したるや明あり、豈に今日言ふ處の
或る宗教の如き、無差別的平等あらむや
彼れが此の山に於ける留錫は、殆んど二年に及ひぬ、彼
れは流石に佛祖正傳の大戒を書せる嗣書も拜しぬ、或は
袈裟の功德の無偏ある事をも知りたり、亦或る時は法
鉢の尊きをも感しぬ、屢々悟道の許可をも得たりき、然
れども未だ自ら肯へんする能はさりしあり、彼れは遂に
經山に登り、又育王山、萬年寺とあらゆる、名山巨剎
を巡錫し、大に己師を求めたるも、彼れは彼れが所謂

良師に邂逅する事能はずして 再び天童山に無際禪師を
 訪ふ可く 餘儀なみされたり 彼れが錫を廻へして
 再び天童山に向ひたる時 彼れは非常なる異響を耳に
 せり 非常なる悲聲を以て滿たされたり 無際禪師の入
 寂てふ慘膽たる死聲を聞きぬ 彼れの 錫は慄ひぬ 彼
 れの脚は掉ひき 彼れの聲は懐るひ 彼れの心は惛ひぬ
 彼れは悲歎遂に止む能はざりき 然れども斯くある可
 きに非らざれば せん方あくも天童山に留錫せる明全の
 安否をも問はむと 登山を急ぎければ あみ哀れ杖とた
 のみ柱とたのみたりき遠旅の 明全も 旅窓一片の煙と

明禪遂に
 異郷の土に
 化せり

消えつると聞き 彼れの悲歎重ね重ねも いや増して
 真に天涯の孤客 物の哀れを誰れ語らばむ 人もあく友
 もなく 愈々歸國を急かむと決せしに

天涯聲あり
 知て教ゆ

天涯聲あり彼れに告げて曰く 汝の師たる可きは今の天
 童山の如淨禪師なり 疾く参問して無上の大道を了せよ
 と 彼は彼れの渡唐以來の歴訪を初め 天童山に再登の
 意を告げけるに 如淨直に彼れに告げて曰く 佛々祖々
 面授の法門現成せりと 是れ宋朝の寶慶元年乙酉道元時に
 二十六歳
 五月一日なりき 其れより彼れは親しく如淨の會裡に在
 りて 参研學得する事少みならず 而かも親密に而かも

佛々祖々
 面授の法
 門現成せり

叮嚀に宛も親子の情を以て參學したる一二の參問を掲
げむに

實慶記にづく

道元幻年發菩提心一在本國訪道於諸師 聊識因果之所
由 雖然如是 未明佛法僧之實皈 徒滯名相之懷慄
後入千光禪師之室 初聞臨濟之宗風 今隨全法師而入
炎宋 航海萬里 住幻身於波濤 遂得投和尚之法席
蓋是宿福之慶幸也 和尚大慈大悲 外國遠方之小人
所願者 不拘時候 不具威儀 願々上方丈 欲拜問恩
懷 生死事大無常迅速 時不待人 去聖必悔

彼れ道元
は聞法自
甲の幸を
得たり

本師堂上大和尚大禪師大慈大悲哀愍聽許道元大道大

法伏冀慈照

小師道元百拜叩頭上覆

如淨示云 元子參問 自今已後 不拘晝夜時候 著衣
祝衣而來方丈問道無妨 老僧一如親父之恕子無禮也
何ぞ彼れが禮を致せるの厚き 而かも如淨の亦彼れを信
するの厚き 親父の子の無禮を恕すに一如すと 兩人の
間當に親子の愛に於けるが如く眞に聖人の佳遇と謂つ可
きか

寶慶元年七月初二日參方丈道元拜問 諸方今稱教外別

獨は如淨
との關係
親子の如
親子の如
きもの有
りしなり

傳而 爲看祖師西來之大意其意如何

如淨示云 佛祖大道拘内外 然稱教外別傳 唯摩騰等
所傳之外 祖師西來親到震旦 傳道授業故云教外別傳
也 世界不可有二佛法也 祖師未來東土先東土有行李
而未有主 祖師既到東土 譬如民得王也 當爾之時
國土國寶國民皆屬王也

是れ彼れが參得の有様にして 如何に禮厚く 如何に叮
寧に 而かも親密の其間に置もりしかを知らむ 蓋し西
來の佛法は 東西の兩聖人によりて 全く光輝を放らた
りと云ふ可きか 先賢言へるあり 之れが前を爲す事莫

ければ美と雖ども影われず 之れが後を爲す事莫ければ
盛きりと雖ども傳らず 是の二人の者未だ始めより相須
たすんばあらずと 蓋し彼れの如淨に於ける亦斯の如き
か されば彼れの傳法は當に唯々坦々の便道によりてあ
されしや明あり

彼れが辨道修行は 愛兒が母の胸中に於て 乳食を受く
るが如くありしあり 親近最と安き 室中に大法の受授
を遂げ得たるなり
彼れは充分に學び 充分に參問させし間に 隣坐の僧の
坐睡に入りたるを 如淨の痛呵せるを聞き 豁然として

豁然として大悟
徹底せり

無上道を悟り 直に方丈に參して印可を受けたるあり
 是れ彼れが身塵境に在りて心已に絶對界に入りたるあり
 彼れは寶慶元年九月十八日に於て 佛祖正傳の大戒を
 了受せりき 茲に彼れは渡唐の大使命を果たし得たりき
 此より彼れは江西其他の地方に 遊歴する事二ケ年余
 宋朝の寶慶三年訂の冬に至りて 歸國の旅裝をなし 如
 淨禪師に暇を乞ひたるに 如淨は夜半入室せしめて 懇
 ろある垂誡を與へたりき 斯く所願満足して歸國の途に
 就かむとする彼れの胸中は 宛かも生地を變へたらむ如
 く 如何に唐土のゆかしかりしぞ 如何に親父の如き如

歸國の途
 に就かむ
 とせり

如淨別
 處に
 所屬に
 者

淨の恩愛に泣きたりしぞ 生者必滅會者定離は人事の常
 と知りつゝも 生別死別を兼ねたる 師弟の離情如何あ
 りしぞ 然れども彼れは長く執着し得可くもあらざれば
 旅裝を整へ販國の途に急ぎぬ 愈明朝の出發と定め
 りし薄暮に於て 彼れは碧巖集百則十卷を見て 一夜の
 間に之を寫し得たるあり 嗚呼彼れや販途に際してすら
 勉強斯の如し 况むや平時の勉強想ふ可きなり 彼れが
 如淨の會裡にありし事僅に三年にして 佛々の大道を悟
 了し 祖々の語録を覺了せしや知る可きあり
 如淨は諸の大衆と共に 門送し來りて 道元の方に車に

授せむとせし時示して曰く 爾有求法之志操 吾之所懽
 喜也 洞宗之所託者 爾乃是也と 噫彼れは 満足ある
 嗣法を遂げ 充分なる辨道を了したる上に 尙も偉大あ
 る傳法の任を負ふて皈れり 彼れは眞に吾島帝國に生存
 し生活せる 幾億方の生靈の皈着を定む可き 重大ある
 任を負ふて皈朝せり 彼が任や誠に唐土に於ける祖師の
 西來に等しかりしか
 法は死物あり人は活物なり 縱令甲地に無價の寶を藏す
 るも 乙地之れが供給を渴望しつゝあるも 人為の運搬
 の助力なくして 何ぞ兩地之融通を得可き 古昔世界の

洞門の使臣として大なる責任を負ふて歸國せり
 大法の移傳者

文明の淵源たりし ヒマラヤの深谷に 幽遠の大法を有
 し 青蘭の小嶋に 高大の珍寶を藏するあるも 唐土に
 於ける 幾億の生靈が 靈魂の立脚地を求むるに吸々た
 るも 祖師の西來無くむば 何ぞ生靈に歸着の處あらむ
 や 吾國粹の精華たる大和魂や 實に民族の杖たり柱た
 り 然れども之れが修養に勤めたる 禪定の傳はる無く
 んば 何ぞ今日の盛大を期す可けむや 然らば斯法の傳
 播を成し 斯法の布殖に勉めたる聖僧道元の徳亦貴から
 ずや

不立文字の證釋

嗚呼彼れが錫を唐土に廻らし 苦心慘履 名經巨録に思

迦以來一
代の祖師

集徳は
生物に及
べし

を焦し 坐禪の床に不思議底を思量して 遂に不立文字
教外別傳の大法を謫傳し 佛々祖々承傳の謫法を嗣受す
する事 一器の水を一器に移すに等しく 増大せず減少
なく 釋迦以來五十一傳の血脉を繼ぎ 震旦の大法を輪
入せる 彼れの責任豈大からずや
彼れが齋らし歸りたる 廣大ある大法 無限なる功徳の
中には 吾國土に於ける 生物無生物の上に 偉大の勢
力を有せしぞ 彼れが如淨より付屬されたる洞門の大事
には 生存せる生存せるある人靈の上に 轉法輪の大偉
力の存せしぞ 彼れが轉法輪は如何ありしぞ 彼れが行

季の風光は如何ありしぞ 請ふ彼れが歸朝後の化儀布敷
を知らむと欲せば 經歷の第四節を一讀し來れ

四 歸朝後の彼

玲瓏無垢の佛身に 祖々の語録を纏ひ 清淨不汚の大海
に 眞如靈光の月を浮べ 大なる責任と 重き使命を負
びて 歸途に上れる彼れは、錦繡綾羅の法舟に 胞護さ
れつゝ 法身恙なくして 安貞元年丁亥の冬 六花續紛
の間に 肥後の川尻港に安着しぬ

郷土床しの港灣は 錦衣歸國の彼れを歓迎して如何あり
しぞ 草木は如何 國土は如何 山岳は如何 川河は如

六花續紛
肥後川に
安着しぬ

郷土の歌

何 鳥獸は如何 同胞は如何ありしぞ 要するに彼れの
 眼に映せしは 悉く快味歎味の風光のみありしや疑ひあ
 し 彼れは彼れが先きに告別せし 郷土の風物のゆかし
 くなつかしく 幾多の變異と 一層の光景を添へたらむ
 心地せしや明あり 彼れは喜悅の風 歡樂の空氣に迎へ
 られて 直ちに京都へ上りぬれば 恩愛の契りや淺から
 ぬ父と兄上の喜びは更にも 知己朋友親戚の歡迎は 彼
 を惹ひて再び凡界の愛に溺れ 塵界の執着に就かしめ
 むとせざるあく 世の執着に陥れむとせり 彼は斯かる
 執着多き京地に留る可く欲せざりき 彼れは直ちに去つ
 て 東山の仙境 建仁寺の古刹に移りぬ 彼れは此處に

洞門の第一
 道場を開き
 建仁寺に
 たり

本朝に於
 ける結制
 安居の矯
 矢

洞門の第一傳道の道場を開きぬ 彼れは此處に法輪を轉
 しぬ 而して定住化儀する事三ヶ年 寛喜年間に及びて
 深艸の安養院に 轉法の道場を遷し 又天福元年癸巳
 の春に及びて 興聖寺を宇治に建立し 其夏初めて結制
 安居し 次て嘉禎二年の冬 初めて開堂の法式を行ひ
 孤雲懷奘を首座に請し 乘拂說法を行ひたりき 此れ蓋
 し彼れが歸朝後に於ける 最初の結制にして 恐らくは
 本朝に於ける安居の矯矢たりしあり 是れより彼れが
 布教の功著しく 化儀の勞多かりければ 彼れの高名愈
 傳はり 彼れの徳風益盛にして 彼れの高徳に感し 彼
 れの法徳を慕たひ 彼れを歸依し 彼れに従身し 遂に

諸法の徒
る數方に上

他門の僧にして衣を改め 宗を更へて彼れの法を繼ぐに
 至りたる者さへ少あからず 彼の初結制に於ける第一座
 即ち雲堂は天台の學匠なりしとぞ 彼れが興聖寺に於け
 る化導十年に及び 出家在家の教を受け 法を聞きたる
 者 其幾方あるを知る能はざるに至りき
 彼れが東漸せしめたる 彼れが傳來せしめたる 釋迦正
 傳の 以心傳心の大法は 吾國幾方の生靈界に一種の異
 彩を放ちぬ 靈界一段の光彩を添へぬ 我國幾方の生靈
 の中には初めて大乘の佛徳を布きぬ 我國幾多の僧界に
 初めて高德の聖僧を見とめ得ぬ 僧界寂として聲なかり
 し 昔日の觀は今や彼れの一大喝の下に起ちぬ 俗界に

諸法の徒
る數方に上

於ける大野心家大不平家も 厭世一偏の晚年僧たる能は
 ずして 教外別傳の大乘によりて參尊修了の功を修めむ
 と望み 心靈界單に因果の理に依りて 人身を受け人身
 を失ふとの善惡業報にのみ惑溺せし小乗の人たりとも
 轉迷開悟の 大道に通達して 直指人身見性成佛たるを
 了せば 誰か佛法の厭世に非らずして 因果應報の解脱
 あるを了したるあらぬ 惡を悔ひ善に歸し 惡しきを改
 め善に進まば 直に是れ本來の良聖人にして 眞に其身
 が佛ならずとせむや 各自良心に順ふの日は 即ち是れ
 見正成佛たらずとせむや 當時吾國の生靈界 殊に武

諸人に適
せる大法

人の宗教観は早くも彼れの教理を取りて 武人の安心立脚地と定めぬるに至りぬ 彼れ等武人は 自己良心の命する處之れと戦ひ之れに死せば 直に靈魂去つて佛地に到來せるを知りたるあり 故に義に臨み 忠に臨み命を顧みるさく 唯良心に是れ順ふが故 常に義氣に富み 勇氣に豊なりしかり豈に之れを厭世と稱す可けじや 彼れは斯かる高尚ある哲理を以て 大和魂を養生せり 彼れが傳來せし禪味や 戰國時代の前後に於ける 北條時代には殆んど武士の生命ありしかり 彼れは在家出家の化儀と共に 如淨に附屬せられたる洞門の爲めには 己

彼の
大著書

れの法の斷絶あらむを慮り 後世の生靈を慮りつゝ 枘管一枝大に大法を明にしぬ 大に宗風を寫出しぬ 其重ある物に至つては 學道用心集 普勸坐禪儀 辨道法 典座教訓衆寮清規 知事清規 正法眼藏の百卷たり 廣録の垂戒たり是れ實に 彼れが生涯の大著述にして 彼れが宗意は其妙味を此間に伏藏せり 是れより彼れは僧俗を問はず 都鄙を論せず 遠路の遠近に關らず 招請に應して説法化導する事數年 高德を重し 功德を稱し 僧俗より 土地寺門を建築し 出世の道場たらしめむと 請へるも少からず 然れども多くは 俗塵の卷

轉法地の
遺跡

都城の邊一も彼れの理想に適し 彼れか選擇に合せる靜養の地ならざりしかば 彼れは未だ終生の定住所即ち涅槃の地と定まりし處をかりしあり 寛元元年七月に至り 波多野義重ある者 越州の山奥にて 松岡の溪間に 闌寂たる靜處 眞に洒々たる地を 寄附せむと申しけるに遇ひ 初めて彼れの理想に適合し 直ちに之を受領してけり 斯かれば義重が左金吾禪門覺念と共に 傘松の邊りに寺境を定め 早速にも地平しをまし 寛元二年七月に至りて 建築落成したりければ 道元直ちに移りて 開堂の法式を行ひ 傘松峯大佛寺と名けたりしが

傘松峯の
創立轉法の所
謂鹿野園

後寺名を永平寺と改め 山号を吉祥山と改稱してけり 此處に彼れは寛元三年四月に於て 結制上堂を舉行し 永住轉法の道場とあそは定めぬ 是れ實に現時の曹洞宗大本山にして 今尙其建築は古松老杉と共に 古へを忍ひ大法の永久に耐へつゝあるなり 此道場こそ釋迦が所謂鹿野園にして 彼れの修生否か永久の轉法輪の處ありしなり 是れより彼れは法を終し道俗を化する 其幾方あるを知らず 或は公卿の招きに應し 或は將軍の請に應し 在家出家の求めに應して 虚日あるなく 京に出て 鎌倉に下り 諸方を遊化する十數年 遂に彼れが涅

槃に入るに至る迄 化導忘る處あかりき 是れ實に彼れ
が 發願利生の現實に非らずや 慈悲忍癡の行事あらず
や

彼れが生涯

一たび宇宙を大觀して 三界の火宅を出で 二たび神靈
の永久なるを認めて 僧界に身心を委ね 三たび佛祖
大道を行して 平々坦々 心は明鏡の如く 身は即ち明
鏡臺の如くにして 清々淨々 玉の如く 月の如くにし
て 明光輝娟 而かも一片の塵翳だも留めざるもの 聖

集が生涯
明鏡の
如し

彼は聊か
も有所得
の念を以
て法を修
せしむる
を

北條氏時
代の民情

僧道元の一代とあす 聖僧道元の生涯とあす

彼れは光榮ある門地を棄て 令譽高き人爵を棄てたる達
人ありしあり 彼れは邪を排して正に就き 法を説き道
を講したるの 大聖物たりしあり 彼れが行脚や 彼れ
が修法や 彼れが講道や 彼れが説法や 一舉手一投足
一言一句の行動たりと雖も 有所得の心 有所得の念
を以てあせし事あきなり

北條氏の世運其盛を極め 王道の衰頽其極に達し 天下
舉げて鎌倉の勢下に趨り 平安の都城寂として廢さく
世は輕浮にして利に伏し 民は愚蒙にして王道を辨せさ

第ハ明皎
輪ヲたる
輪の明月
りたりし
なり

るの時 屹然世外に表逸して 利を警め 道を教へ 天
を説きて 王法を薦めたる 彼れは生涯身を提して 木
擇とあり 先達とありたるあり 然り彼れが生涯は行動
常に順逆を説き 世人の明鏡を以て任したりしあり
嗚呼彼れが存在は 明鏡の天に掛かるが如く 世人が各
自の行動言説を映せしめつゝ 之れを見て恥ぢ 之を見
て喜び 之を見て悔ひ 之を見て悟り 之を見て泣き
之を見て笑ひ 之を見て悲み 之を見て進みたるの 明
皓々たる一輪の明鏡たりしなり
此の明皓々たる明鏡や 七百年前 能く國土を照し 山

明皎身自
りしなり

川を照し 草木を照し 善人を照し 罪人を照し 文人
を照し 武人を照し あらゆる社會を照して眩まさず
光輝引て今日に及び 今や吾國五方の僧侶 六百万の信
徒が精靈は 彼れが明鏡の光りによりて 生存し安心し
つし有るあり
彼れの生涯は明鏡なるが故に 塵翳なく 塵翳なきが故
に 一物の眼に當るなく 一物の眼に當る無きが故に
執着無し 執着なきが故に榮譽幸福に關らず 榮譽幸福
を離れたるが故に 心身自ら明皓々たりしなり
試に彼れか勝觸の一二を擧げむか

獨が廉潔
なる勝願

獨は先天
的の達人
なりし也

彼れが弱年にして發心求道の大願を起し 母兄法眼を迪りて 叡山に登りし時 法眼彼れに言ひける様 身は光榮ある門地の子として 汝の將來は名譽ある攝政關白の重職からずや 何ぞ之を棄てて無味淡白の仙界に投せむとすと 彼れ慨然として 答へて曰く 母上臨終の御遺言もおぼろげからず 且つは浮世の榮花など願ふべきに非らずと

彼れや 名譽幸福を視る事 土芥の如く 門地人爵を視る事 塵埃の如し 彼れか先天的の達人にして 高く世外に飄逸せしや知る可きあり

尙言はむか 彼れが或る時 最明寺入道時頼の招きに應じ 鎌倉に下り 説法化儀八ヶ月に及び 道俗戒を受くる者數百人 時頼徳を慕ひ 別をおしめ 建長寺を建立して留錫を請ひしに遂に受けず 是に於て時頼は越前六條の地に於て 永平寺領二千石を寄附し 其弟子玄明に托して進めけるに彼れ亦受けず 剩つさへ玄明の 寄進狀を持ち來りて 誇り氣ありし心地の穢はしとて 玄明を逐ひ 玄明が坐臥せし床までも 截取り棄てしめしと 是れ豈に彼れが有所得の心を以て法を説かず 清廉能く出家の本分を示し 汚穢の徒弟を戒めたる者にあらず

雲が生涯
の清い生涯
も清い

や 彼れが生涯の清潔ある生行を表示してあまりあるに
非らずや

尙又言はむか 彼れが五十一歳の高年に達し 化儀布教
の二十幾年に亘り 聖聞廣く聞さへ 徳風普く至るに及
びて 端なくも彼れが 聖賢高德の聞さへ 雲外に達し
ければ 建長元年に於て 太上天皇後嵯峨の院より敕使
再度に及び名譽 光榮ある紫衣を賜はりしに 彼れは之
を辞み奉りて「永平雖谷淺 救命重重々 却被猿鶴笑
紫衣一老翁」と敕答したてまつりしとぞ

鳳鳴の御
衣

是れ豈に彼れが 榮譽幸福に關らず あらゆる人爵を放

擲して顧みるなく 心身自ら明皓々たる明鏡たりしに非
らずや

第の生涯
は清い生涯
も清い
潔なりし
也

要するに彼れの生涯は 清廉あり 高潔あり 瀟洒あり
皓白あり 故に五欲六塵の境に遊ばず 名譽幸福の門地
を顧みず 人爵を視る事土芥の如く 塵埃の如し 錦繡
綾羅を以て 形骸を包む 贅物と觀じ 寺領朱印は 幻
身を懦弱からしめ 高行聖徳を汚すの 魔劑と觀し 一
箇半箇に 満足して 苦積の財を求めず 逸然世表に立
ちて 社會の濁流に住まず 絶へて 塵境の汚穢に染ま
ず 超然として 高く行し 高く談し 高く照し 高く

靈光圓滿の明鏡たりしかり

輝きたる 明皓々の明鏡たりしかり 靈光圓滿の明鏡たりしかり

鎌倉時代と禪宗

物窮すれば必ず發す

物窮すれば必ず發すと眞哉言 我朝中世の宗教海は 國家の動搖と共に浮沈し 奈良朝佛教の精華は 王朝の野源平の争に 散乱し 衰頹し 寺境は變して城となり 衣は化して鎧を纏ひ 數珠を棄て、兵器を手にするの状に陥り 五山の僧兵は 世を救ひ人を救ゆるの法身からずして 世を騒し人を毀るの鬼身たりしかり 大法の衰

泰時の子孫に教へたるもの

類 佛界の懷亂は此處に至つて極まれりと言つ可し 鎌倉政府の第一期武斷の政綱は 世を擧げて武勇を尊び 兵戰を好み 腥風漲り 鮮血流れ 蠻風盛にして 宗教の餘命は此間に枯死せむとするに際し 一道の火光 能く佛教の命派を保ち 一縷の活路を興へしもの 是れを北條氏の執政とあす 文以て政令を布くの政綱となす 北條氏創業の英主たる泰時は 子孫を誡めて言ひける様「政を爲すは文に有り専ら武斷を用ゆべからず」と されど經時時頼に至りて 人材を擧用し 仁政を施し 節儉を旨とし 恩惠を以て下を御す 故に將士の妄に離叛す

るあく 人民能く其塔に安せり 是を以て、平和の風
 樂天の雲 東西に充ち 泰平の氣 平安の瑞 乾坤に亘
 り 天下自ら文を弄し 宗教を講するの端を發す 蓋し
 勢の窮まる處 天能く宗教を發せしむるか
 鎌倉の天地は 佛教の發揚時代ありしあり 佛教精華の
 爛漫時代たりしなり 淨土宗の温雍 禪宗の孤風 眞宗
 の徳風 日蓮宗の健行 日本佛教の精華は 華然として
 鎌倉の天に鐘り 佛教眞理の源泉は 燦然として當代に
 湧出せり
 想ふに北條氏が 佛教の發育を促し 宗教の圓熟を助け

鎌倉の天
 地は佛の
 勢の窮まる
 處なりし
 なり

門能く

北條氏の
 政治上の
 變遷あり
 しなり

しもの 國政の變移 思想の發達に因ると離る 北條氏
 が主家の系統を殲滅し 主家の功臣を斬殺し 權威を高
 めむが爲め 地位を鞏固せらしめむが爲め 限りなき罪
 惡を犯し 限りなき悖徳の行爲あるを慮り 罪業の消滅
 人心の恢復を得むが爲めには 佛に歸し 僧を養ひ以
 て 過去の罪障消滅を祈りたる者 一方には日本佛教の
 發育を助け 一方には賢僧聖哲の觀問を得て 北條氏の
 美政を擧げ 眞に一舉兩全の大功を奏したるや明あり
 斯く佛教の鎌倉の地に萌芽し 圓熟を遂げたる 誠に北
 條氏尊佛崇宗の餘熱によりたるや言を俟たず 而して佛

武人の最
信厚せ
なりは禪宗

禪味の淡
白宗風の快
活

活潑々地
大三昧

櫻花の行
を爲し梅
花の威氣
を養成す

教諸宗中獨り北條氏の尊崇を受け 最も武人の歸依を得
たる者は禪宗に非らずや
夫れ禪の能く鎌倉の信仰を得 武家の思想に投合して
隆盛の域に達し 全盛の極に至りたるもの 多くは當時
に輩出せし 傑僧知識の斯宗に夥多なりしに因ると雖も
禪味の淡白にして磊落ある 瀟洒にして快味ある 趙
洲の一禪味ある 茶味の如何に斯宗の風味を穿てるもの
あるか 一たび工夫辨道坐禪の床に入るや 靜ある時は
安住不動 動ある時は快輕敏活 能く英雄の言動に一致
し 能く武士の舉止に類せる者ある也

視よ 禪門の法式を 莊嚴華麗 天女の遊樂に均しき温
良の舉止も 其間髪 容れざる 輕快敏活の者あるを
又視よ洞僧の法堂に臨める骨相を 圓顔長袖 婦女の柔
弱あるが如しと雖も 其間 氣骨稜々 英姿颯爽 武士
の戰場に臨みたるの觀あるを 其宗規門風に至ては 小
節を顧みず 管見を將ひず 活潑々地の大三昧に住して
因循姑息小人婦女の行爲をなし 此宗風 此三昧 以て
敷島武士の廉恥を重んじ 義忠に弊るゝの美風を形成し
以て日本男子の櫻花の行を成し 梅花の威氣を養成す
嗚呼禪の鍛練修養能く 日本魂に盡せる有るや知る可き

北條氏を愛せし
禪を愛せし
自餘の
諸宗に超
然たりし
也

なり 鎌倉男子の美行 元冠擊壤の花は 禪風修養の效
果ありしや知る可きあり 禪の當代に於ける關係斯の如
くにして 北條氏が禪を愛せる 自餘の 諸宗超然たり
しや 節儉の聞へ高き時頼にして建長寺を造營し 剛勇
果斷の時宗にして圓覺寺を建立せしを見るも 亦以て兩
者の消息を窺ひ得るに足るからむ
然り當時に偉大の勢力を有し 北條氏に關係淺からざり
し禪風の 全く道元の力に依りて傳へられ 全く彼れの
謫傳の下に轉せられたるを思はし 又以て彼れが當時に
名聲の普ねかりしを想はざらむや 彼れの高德は東西乾

渠は時頼
執政の願
問を辭せ

渠が能く
史傳に赫
々たるもの

坤を通して傳はりぬ 彼れの聖徳は青雲を翹えてたかび
きぬ 彼れが宗風は令譽聲聞と共に傳りぬ 然れども彼
れが令聞名聲は彼れが 北條氏の意に合はず 幕府の好
意に反して 時頼に王法を説き 時頼執政の願問を辭し
たるの時に於て滯りぬ 是れ彼れが史傳に勝觸を印せさ
る所以にして 世人の榮西を知るあるも彼れありしを知
らざる所以たり 然れども彼れが眞理 彼れが教意は燦
然として千載の下尙 吾國土に輝けり 現今洞門の信徒
六百万の生靈は彼れが眞理の泉に醉へるあり 嗚呼道元
の二字は鎌倉の天地 時頼が威赫の下に没せしも 禪宗

思想界に及ぼせる影響の偉大なりし也

人生に無むを教へたる警語

六六
の名は鎌倉の天地に全盛を極めたるなり 時頼か信仰の下に傳へられたるあり 豈に禪の吾國思想海に及ぼせる影響の偉大ならずや 豈に禪の鎌倉時代に有せし關係の重大ならずや

彼れの理想

一 無常觀

蜉蝣の一期 朝露の消生 夢幻泡影は世のならひ 實に韶光鮮ある春の朝には 紅顔麗色花の如きの美ありとも 愁風吹きしきる秋の暮には 眼花既に凋み 命葉忽ち

俗なる者ばを擧ぐれば

俗中の俗たる者

六七
散す 人世は夢の如く 萬事は幻に似たり 何物にか執着し 何時迄か汚染せむと 是れ豈に人生無常を訓へたるの警語たらずや
偽善の衣を身に纏ひ 虚榮の富を笠に着て 不義の快樂に狂ひつゝ 不倫の道に迷ひ出で 徒に 金銀珠玉を貴び 美田大厦を喜び 高譽を求め 榮位を望み 其甚だしきに至つては 一生守錢に汲々し 終生爵録に奔勞し 絶へて生死の何たるを思はず 無常の時なきを悟らざる者 舉世然るの狀態に非らずや
彼等の多くは 英雄崇拜者たり 富豪尊崇家たり 人爵

豈に生死の果
流轉のなきを
知らむや

奴たり 守銭奴たり 故に 風雲の機を望み 投機の商
を試み 議堂に名を競ひ 非道の欲を逞ふす 惑乱是れ
より起り 鬭争是れを基とす 紛々たる世俗 豈に廉恥
の重ず可き 仁義の行ふ可きを知らむや 世を擧げて名
譽に趨り 幸福に赴き 仁義道德の道 茲に頽廢して
利を好み 録を喜ぶ 豈に 生死流轉の果なきを知らむ
や
朝には駟馬に鞭ちて 街頭を飛行し 夕には綺羅を装ひ
て 夜會に臨み 風雲に乗し 威福を極め 意氣昂然
歌ふて曰く 醉ふては美人の膝に眠り 醒めては兵馬の

渠等の處希
望するの
花の朝の
快たるの
樂たり

權を握ると 快は即ち快からむ 唯に瞬間の快たり 富
巨萬を積み 貴王侯を凌ぎ 穰々として野に稔るの 良
田萬項を有し 輝々として光を放てる 瓊珠珍寶を藏し
誇耀慢侮 語つて曰く 着るに錦繡綾羅の美服あり
食に山海珍味の佳肴ありと 樂は即ち樂からむ 單に寸
隙の樂たり
要するに渠等の喝望し 渠等の希望する處のものや 董
花一朝の快たり 紅榮黃落の樂たり 何ぞ永遠無盡の快
からむや 長久不衰の樂からむや
唐の詩人歌ふて曰く 天地は萬物の逆旅光陰は百代の過

人生の眞相を穿て
る醒語な
らすや

詩人西行
が無常觀

客 而して浮世は夢の如し 樂をあす夫れ幾はくぞと
 是れ彼れが 人生の眞意義を解したる 觀察に非らすや
 當に是れ 人生の眞相を穿ちたる 醒語ならずや
 詩人西行は 細かに人生觀を論じて曰く「壽命は蜉蝣の
 如し 朝に生れて夕べに死す 身軀芭蕉の如し 風に隨
 つて壞し易し 綾羅錦繡は 全く冥土の貯へにあらず
 黄金珠玉は 只一世の財寶あり 榮華榮耀は 更らに
 佛道の資にあらず 官位寵職は 唯現在の名聞なり 鶴
 龜の契りを致すも 露命の消へさる程あり 鴛鴦の衾を
 重ぬるも 身軀壞せさる間にあり」と 觀じ去り觀じ來れ

渠等が論
する所の
もの

ば錦繡の望む可き無く 黄金の貯ふ可き無し 鶴龜の契
 鴛鴦の衾 吾人に於て何かせむ
 論者或は言はむ 黄金珠玉は天下の至寶あり 榮官顯職
 は人生の最大幸福あり 視よ光哲は 富と幸福を以て
 人生最大の目的ありと 斷言せしを 榮官顯職以て 青
 史に赫々の偉名を印す可く 黄金珠玉以て 人界に自由
 の偉力を振ふを得可しと 其れ人世 富と幸福を得るの
 目的や 畢竟人の人たる道を行ひ 人界の義務を果すの
 資に過ぎず 然るに渠等や 黄金を主とし 顯位を先と
 し 金錢 奴隸 爵位の使臣として 惡を働き 罪を犯

能を得て
蜀を望む
動物
的
理想
的
曰ク
セラス
曰ク
人間
の理想
の追
想者
なり

し 他を陥れ 人を誹るの 悪行罪過を顧みず 剩へ渠等の目的を得たるの後も 一を得ば 二を望み 二を達すれば 三を希ふ 其欲望の遞昇にして 底止する處なきを知らず 所謂隴を得て蜀を望む的 利欲の動物たるを解せざる者の言あり 歐洲の先哲ヲセラスは 人世思想の覆面を觀破して曰く 人間は理想の追想者なりと 其れ然り豈に其れ然らむや 噫渠等は 限り有るの命を以て 限り無きの欲を充たさむと欲す 何ぞ感へるの甚だしきや 眞に渠等は 五欲六塵の夢に襲はれて 遂に人世の真相を悟る能はざる者なり

死出の旅
路の旅装

り 能く人界の悲痛を去り 三界解脱の歡を買ひ得ざる者なり 試に想へ 渠等の希望し 羨仰する處の 富と幸福は 如何に榮職令譽の顯官たりとも 王侯長者の蓄財ありとも 一たび無常の 冷風にさらはれて 露の命と消へぬるに至つては 黄金の偉力 榮譽の權威も 死ある變化の大悲痛を去る能はざるを 此處に至らば 鏹々たる錢貨の泉も何かせむ 華麗ある錦繡の山も何かせむ 只死に伴ふは 銷錢六文の旅費 薄き京帷子の旅装たるに過ぎざるを 百尺竿頭一步を進めて 英雄名將を古戰場に

試に英雄
に古戦場
訪へ

訪へ

七四

夕陽西に没し 悲風吹いて休まず 荻花風に戦きて 月
朦朧 悲聲肅殺の間遙に眸を回らせば 寂寞たる原頭
草葉の滴露 是れ昔人の涙なり 残墳遺跡 衰柳已に枯
れて 旅魂幽魄 今何れにか彷徨はむ 流泉忽々去つて
還らず 古松老柏誰が爲めにか吟せむ 想ふ千古の両雄
が 利鏃を振ひ 金鞍に鞍ら 三軍を叱咤し 六軍を覆
へしたる處 旌旗翻り 石火閃ぎ 猛卒斃れ 勇將没し
山河轟き 坤軸挫け 紅血原野に溺りて草腥く 死尸
徑に横りて地坼かしかりき 修羅虎狼の鬭争場 空しく

人事世態
の變遷
の少なき
世なき
悟らむ
更らむ
の墓地
遊べ

朽ちて 又昔日の觀あらず 星霜積て幾百年 嗽々たる
風雨餘怨を激し 落葉徒らに 片々として 松籟唯聲を
讓る 此時に當て 一種の感慨は湧起せむ 眸を凝らし
て 夜月の朦朧たるを望め 悲風の颯々たるを聞け 草
庭に座來して 時世の變遷を觀みよ 嗚呼 茅茨蓬草の
野 茫々たる荒原は 老松古柏 衰柳の古景を留むるも
又昔日の英士あらず 人事世態の轉遷 恃み少なき世
あるを悟らむ
更に北邙の墓地に遊べ 墳塋疊々たるの處 無數の殘墳
は 是れ昔し 紅顔の美少年白髮の老翁の影と知らずや

七五

願じ來れば 誰か形骸の美醜を擇はむや

唐の詩人は 更に醜骸を論じて曰く

洛陽城東桃李花 飛去飛來落誰家 洛陽女兒惜顏色

行逢落花長歎息 今年花落顏色改 明年花開復誰在

已見松柏摧為薪 更聞桑田變成海 古人無復洛城東

今人還對落花風 年年歲々花相似 歲歲年々人不同

寄言全盛紅顏子 應憐半死白頭翁 此翁白頭真可憐

伊昔紅顏美少年 公子王孫芳樹下 清歌妙舞落花前

光祿池臺開錦繡 將軍樓閣畫神仙 一朝臥病無相識

三春行樂在誰邊 宛轉蛾眉能幾時 須臾鷄髮亂如絲

唐の詩人は更に醜骸を論じて曰く

冥々たる生死の時に何れか出離せむ

但看古來歌舞地 惟有黃昏鳥雀悲

是れ豈に人生のはかあきを示せる 警語ならずや 人生

の真相を穿てる無常觀にあらずや 嗚呼吾人は 紛々た

る塵境 何れの時か解脱せむ 冥々たる生死 何れの時

にか出離せむ

冬天落葉 乾坤悲慘を極め 寒雲疎雲高城を過り 寒風

蕭殺衰柳を痛ましむるの時 寒房燭影微にして夜寂然

唯深巷に群犬の長鳴するを耳にして 恩愛の影骸を守り

悲哀の涙に咽べる 八歳の孤童久我道元は、母の枕上

に焚きたる香煙の 消滅せるを見て 忽然として 人生

道元の無常の時を觀せし

ての 無常觀を歌ふて曰く

朝日侍草葉の露のはどあきにいとあ立そ野邊の秋風
世の中は何にたどへん水鳥のはらふる露にやどる月
影

彼れは斯の如く 無常を觀じたるあり 彼れは人世の無
常を以て 紅葉黄落の樹に比したる也 飛散せる露に宿
れるの月影に譬へたるあり

彼れが三界の道師として 世に教へたる無常觀は 如何
ありしぞ彼 れは發菩提心を講じたる章に於て 人生の
無常を教へて曰く

無常觀
示せば人
常觀し無

渠は無常
を觀じたる
る境に離れ
塵を離れ
たる者なり
りたるを説
りたるを説
けり

誠夫觀無常時 吾我之心不生 名利念不起 恐怖時光
之太速 所以行道救頭燃 顧眄身命不牢 所以精進慣
翹足 縱聞緊那迦陵 讚歎の音聲 夕風拂耳也 縱見
王嫡西施 美妙之容顏 朝露遮眼也 已離聲色之繫縛
自合道心理致」と

彼れは無常を觀するの時は 即ち菩提心を發するの時を
りと教へ 無常を觀じたるの後は 之境の繫縛を離れた
る 者ありと説けり

更に彼れが晩年に於ける無常觀を求むれば 彼れは老の
病に腦まされ 京に上りて療養の便を受けむとし 傘松

樂天的歌

の峯を下り 永平の谷を出で 旅装木の目山に至りし時
 彼れは 樂天を詠じて曰く
 草の葉に首途せる身の木の目山雲に路ある心地ある
 すれ
 是れ豈に 彼れが五十四歳の高年に達して 老の病と悟
 りつゝ 生死流轉の境を離れて 高く絶對界に 飛揚せ
 むとの 感慨に非らずや 雲に路あるの一句は 如何に
 樂天の趣味を有せる歟
 要するに彼れは 人世の無常あるを觀じ 名譽の恃む可
 らざるを悟り 富貴の長久あるを知らず 夢幻泡影の

相對界の
 汚塵を去
 つて高く
 絶對界に
 至らむに
 せり

厭世樂天
 の定義

世 如露如電の身命に 愛着し 執着す可からざるの理
 を 徹底大悟せり 而して解脱得道せり 遂に相對界の
 汚塵を去つて 高く絶對界に至らむとせり

二 厭世と樂天

何をか厭世と言ひ 何をか樂天と呼ぶ 曰く厭世とは人
 世は悉く吾に逆ふて造られたり と斷定し思推する時
 其觀念は既に已に厭世觀に墜たれたる時と知らずや 曰
 く樂天とは 俗塵を超へ 厭世を絶して 自然と合し、
 天然に同化し 心は坦々 道は閑々 宇宙の和樂 宇宙

の莊觀 天地の妙相 天地の理想と一致して、心身自ら
明光々たるを言はずや

吾人は彼れ道元が 無常觀に觸れたるの人あるを想ひ
三界の火宅を去りて瀟洒ある僧界に入り 心を幽玄の底
に徹し 身を三昧の門に置きたるの人あるを思へば 彼
れが世を厭ひ 俗を遁れて 僧界に入りたるの人あるを
察想するに足れり 渠れは眞個に 人界の苦痛を感じた
りき 人世の恃み少きを知りたりき 彼れは塵境に執
着す可き一物の存せざるを知ると同時に 世界は彼れに
對して惡しく造られたる者あるを觀じたるあり 是れ彼

れが悲觀的に社界を觀たる當時にして 彼れが八歳の幼
時にてありき 當に彼れか慈母の死を悲みたるの時なり
き 即ち是れ彼れが厭世の心を生じたるの時ならずや
然れども彼れが厭世に沈みしは 眞に少時の間ありき
曰く「海世の榮花など願ふ可きに非らず 早く出家得道
して 無上菩提の悟りを開き 一切衆生をも濟度せむ」
と是れ豈に彼れが相對界を去つて 絶對界に至らむとせ
し思想にあらずや 嗚呼彼れは厭世の親に觸るゝと同時
に 神靈の不滅を悟りたりき ライフの永久あるを見と
めたりき

彼れは遂に自然と合せり

而して彼れが僧界に涵泳し 行脚する事十數年 名僧を
 彷彿ひ 知識に學び 遂に錫を轉じて 唐土に遊び 豁然
 了達して 無上道を悟り 天に歸し 自然と合し 天地
 を説き 自然を説き 宇宙の自然界に同化したりき 故
 に其の發する所の者は 天地の美聲あり 自然の妙相な
 り 詩に於て歌に於て 彼れの發せし所の者は 宇宙の
 美を吟し 天地の樂を歌ひ 偉大の思想 莊嚴なる念想
 瀟洒たる觀想 磊落ある理想 當に是れ 樂天の理想を
 發したりき

春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり

樂天の理想なり

峯の色溪の響もみかゝから我釋迦牟尼の聲と姿と
 霧はれて曇らぬ西の山のはにかゝるも清き月の影
 まどひ行うき世の中にもゆる火を古郷とのみ思ひけ
 るかき

後の世も嬉しかる可き道あればけう行空ものどけか
 りけり

さまざまにうき世の花は匂へ共同し佛の身とぞなる
 べき

吉野山奥に心のすみぬれば散る花もあし咲く枝もあ
 し

法の聲に聞きろわかれぬあかき世の眠を覺や曉の鐘
いかばかり其夜の月の晴にせん君の御山は雪も残ら
ず

濁は穢々
さして天
地と共に
樂み自然
に變異
共變異
に變異

是れ彼れか 山河に於て 明月に於て 人生に於て 生
死に就て 花に對し 雪に對し 春に夏に秋に冬に對し
て 自然を歌ひ 樂天を詠むる者あらずや
此の時に當つて 彼れが心境 更に一瞬の汚塵を止めず
蓄財の心なく 華飾の心なく 貧に足り 素に足り
苦痛なく 憂愁なく 悲哀なく 怨恨なく 憤懣なく
不平なく 雍々として天地と共に樂み 自然と共に變異

風原の理
想

せり

唐の詩人歌ふて曰く 蒼浪之水濁以可洗吾足 蒼浪之水
清以足洗吾纓と 蓋し道元が云あるか
然りされは 世と共に移り 世と共に變りたりき 天地
と共に浮沈し 自然と共に移動せり 故に生死の別を見
ず 變化の著しるしき 行動の異なるを見ず 彼れは
人生を去つて 樂天に到らむとする時 自己を歌ふて曰
く

「五十四年 照第一天 打箇躑躅 觸破大千嘆 渾身無
着處 活陷黃泉」と

渠は生死
の別なき
を歌へり

九二

是れ彼れか心事に於て 生死別を思はず 死の悲む可き
なく 神靈の異なるなきを 意味せる者あらずや 相對
と絶對間 更に 境劃を見とめざる者あらずや
嗚呼彼れは 厭世を超絶して 高く吟し 高く歌ひたる
樂天家ありしあり 大宗教家ありしなり 古人言はずや
刀人經世 能人取世 曉人達世 高人出世 達人玩世
と 蓋し彼れが如きは 眞に達人と言ふ可き也 樂天世
を玩ぶ者と言ふ可き也

宗教家と去ての道元

宗教家の
理想

一道の靈光 永久のライフ 光芒終に消すべからざる者
あり 疑もなく 是れ高遠なる大思想を 此の裡に含め
る 人類思潮の最高水平線あり 詩人として 文人とし
て 思想家として 宗教家として 人世の天職を盡さむ
とする者 誰か亦這般の理想を抱かざらむや

我朝今時
の思潮

余は宗教家としての道元を論ずるに先ち 我國思想界の
風潮を探り 今時の宗教家を論ぜむと欲する者なり 現
時の思潮 現時の宗教界に就て 余が感ずる處を言はし
めよ我國思想海の風潮が 歐米の文化に酔ひ 文化に眩
惑し 變化をなし 感化を受け 今や 幾多の上帝主義

九三

國粹保存者
國粹の
發育者

基督教趣味は 我國思想界の一部を領するに至つて
 一千年來 我國思想の 涵養に力めたる佛教 二千年來
 思想の發達に功ありし儒道 三千年來 思想の根底を
 かし來りたる神道は 忽然此刺激に由りて 桃原の夢を
 破りぬ颯然として起ちぬ
 俄然國粹を喃々し 日本主義を喋々するに至りぬ 而か
 も老後の衰頹 醉餘の老体 能く撥亂反正の功を遂ぐる
 能はざるあり 嗚呼渠等神儒佛の三道は 凝りて百鍊の
 鐵とあり發しては萬朶の櫻となる 國粹の基礎をなし
 精華の幹を爲す 渠等の我思想界に貢獻する 處少あり

物久しげ
れば朽つ

我國思想
の壞敗期

とせざるなり

然れども 物久しければ朽つるの言に漏れず 渠等は長
 きに馴れ 久しきに亘り 傳道に怠り 布教に勤めざる
 に至りて 腐敗し衰頹し來りたるなり 實に徳川三百年
 間平安の暖夢は、我國思想界の壞敗期と云ふも不可なき
 あり 今渠等の最大ある佛に就て言はむか 僧侶は名薄
 を領じ 朱印を有し 以て民に臨み 以て權を振ふ 何
 ぞ清廉不貪 高潔不濁 能く僧侶の本分を盡し 能く布
 教の責を全ふするの名僧出でむや 僧界の汚濁 破戒の
 圓顛 到底國民の信を繋ぐ能はず 明法地に頹れ 聖法

跡を絶ちて 亦思想界を涵養せず 國民思想の衰頹し
下劣に赴く豈 に無理あらむや 豈に必然の定理から
や面して我思想界が 歐米文化の燦然に喫驚し 西洋思
想の注入に覺破され 驚愕し 狼狽し 周章し 悲泣し
絶叫するに至りたるなり

人種競走
より來れ
る我思想
界

人種の競争 東亞の滅亡は 幾多の思想家 幾多の先覺
者によりて稱道せらるゝに至り 國粹の保存 日本主義
の擴張は 我國思潮の混乱を來せり 國民思想の攪亂を
來せり 曰く何によりてか 國粹精華の發達を期し 何
に基きて日本主義の擴張を圖らむと 茲に行爲の標準を

古聖先賢
のルーツ
ンク
ンク
ンク

云々し モーラル、コート即ちモーラル、モデルの選擇に
つとむるに至りて 各自其向ふ所を異にし 其擇ふ所を
異にすと雖も 要するに自己の發達を期し 國家の圓滿
を期するにあり 故に彼等の選む所 孔子のパーチュー
に於て 釋迦のマーシーに於て 基督のラブに於て 乃
至華盛頓のリバーチーに於て 那破倫のクローリーに於
て ルーリング、パッションを得むとせる者 是れ豈に
思想の發達にあらずや 渠等は 此モーラル、コート、を
定めんが爲め 此モーラル、モデルを得んが爲めに 詩
人を知り 文人を知り 哲理を究め 宗教を學び 遂に

宗教の思
潮に及ぼ
す影響

宗教にモデル、コートを取るの 最善あるを信するに至り 宗教の必要を感じ 宗教の思想に有せる關係を知りたるなり 國民思想界の發達につれ 宗教觀念の擧吹せらるゝに至れるを知りたる政府は 宗教の閑過すへからざるを知れり 實に宗教の勢力は一國の盛衰消長を左右する力あるを知りたるあり

宗教法案の
は議場の
大問題な
り

今や國會議場の大問題は 宗教法案の消長あり 民間爲めに狂ひ 政黨爲めに動く 上下法案を論じて鬨々たるに非らずや 新紙に劇場に 到る處角論争辯するに非らずや 是れ當に我思想界か進歩せし現象に非らずや

國民理想
の傾向

起てよ神
儒の英傑
のへよ佛
門の獅兒

進歩せる思想界 發達せる理想界は 能く眞宗教を擇み 能く眞宗教を抱含する能はずと雖 神儒佛の國家に有せる歴史的關係 新來基督教の斬新ある 神儒佛の衰頹せる基督教の活氣ある明に判断するの腦を有す 盛に付し 衰を去り 古きを棄て 新しきを求むるは 我國民の理想あり 故に國粹の涵養に力め 精華の發育に盡し來りたる 舊宗教は今や 進路を失ひ 活路を失はむとす 嗚呼輕佻の風 浮薄の習慣は 三千年來保存し來りたる國粹精華の 養育者に向て 無慈悲ある 離別を與へむと欲す 起てよ神儒の英傑 振へよ佛門の獅

我宗の英界
佛門の親切
士を事切
するなり

佛門の大
立物たる
大宗教の
道元を追
想せむ也
欲する也

兒!!!

今や我宗教界 佛門の英士を歓迎し 僧界の豪傑を待つ
事急 然かも一人の英士出でず 一名の豪傑出でざるあ
り噫沈滞せる今日の佛教界 一人のキックリフは生せさ
るか ヴォヨン、ハツスの革命者起たざるか ルーサーの
宗教大革命者は出でざるか 鶴首世人の革命者を待てる
急かりと雖も 未だ起たざるを如何せむ 輩出せざるを
如何せむ 茲に至りて余は 世人の渴望に對し 歓迎に
對し 古聖佛門の大立物たる 聖僧道元の宗教觀を照會
せむと欲するあり 大宗教家道元を追想せむと欲すんか

眞道元は
禪風の擧
揚者たり

徳孤なら
ず必ず隣
あり

鎌倉の天地 北條氏の時代 文運衰へ 王政亂れ 秋風
時に寒く 戦亂和亞くの間にて 禪風を擧揚し 教
外別傳の 法を稱へたる千古の聖哲道元を生したり 鎌
倉の時世多くの宗豪を出し 幾多の開祖を出すの 端を
發したるあり、
古聖言はずや 徳孤ならず 必ず隣ありと 彼れは直ち
に親鸞を得 日蓮を待つて 佛教の叢淵を 鎌倉の地に
創建せり 鎌倉の天地を日本佛教の發揚時代たらしめた
り 日本佛教精華の根因を形ち作れり 而かも彼れは此

時頼に王法をすむ

時代に於てすら 鎌倉幕府の黄金時代に於てすら 時頼に王法をすしめ 王法を講じたりき 親鸞日蓮次て 王法を講じたりき 想ふに彼れか 宗教家として 國体を忘ぜざりし者あつて存せしや必せり 彼れが理想家として 宗教家として 當世に卓越せし處の存せしや 疑を容れずと雖も 彼れの直言直行 信厚の本体を失ふあく 遂に鎌倉の忌避を受けし者ありしを知らざる可からず 是れ余が彼れの宗教觀に於て大に 社會に告げむとする處あり 諸君は特更に 彼れが日本的佛教の擧揚者にして 國粹を尊び 國体を重むたるの人たるを知られむ

國は國家的觀念の爲めに座位を争へ

宗教家としての清廉

事を望む者あり

彼れ嘗て支那に遊ぶ 時に唐僧彼れが日本僧の故を以て 唐僧の下座に置き 敢て宗法に順はず 彼れは國威の失逐を顧み 唐僧の無禮を憤り 宋朝に奏して詔敕を以て座位を正さしめたりし事あり 是れ彼れが出塵の亞仙として 座位の上下を思はざるも 國威の毀傷を如何せむ 日本國家の光輝を如何せむ 實に彼れは國家的宗教觀念の爲めに座位を争へりしあり 是れ豈に彼れが國家的宗教家たりしを 表して余り有るに非らずや 實に渠は 廉潔ある宗教家なりしあり 出家の分を守り

僧界のモラル、コートたる 宗教者たりしなり 彼れ
が時頼に對して寺領を辞し 一箇半箇に安んじて 尺寸
の地領 勺夕の貨財をも貪らざりしは 渠が清淨洒々
一点の塵欲をも留めざりき 眞の法人ありしを示せるも
のあり

又渠は 一箇半箇に安んじて 貨財を貪らざりしと同時に
に 布衣弊服に満足して 華麗の美服を貪らず 浮空の
名譽を貪らざりし人たる也 渠が後嵯峨の院より 知過
の榮を忝ふし 名譽ある紫衣を賜ひしも 辞み奉りて
受けざりしが如きは 渠が人爵を喜はず 榮花令譽を希

渠ハ令譽
幸福を喜
ばざりし
也

渠ハ禪に
對する理に
想對する

はざりき 廉潔の僧侶ありしを 表はせる者あらずや
更に渠れが向上の宗風に至つては 吾人の到底窺ひ知る
處に非らさるも 試に渠れが禪に對せる吟詠の或る者を
舉ぐれば

濁りあき心の水にすむ月は波もくだけて光とぞある
此心天の空にも花ろかふ三世の佛に奉らはや
頂に鵲の巢やつくるらむ眉にかゝれるさゝかにの糸
佛法は鍋のさか焼き石の髻壽に書く竹の友つれの聲
尙ほ彼れが二三の教詠を舉ぐれば

教外別傳

渠ハ教詠
一二

荒磯の波もよよせぬ高岩に書きもつく可き法あらば
ある

不立文字

言捨しその言の葉の外あれば筆にも跡をとらめざり
けり

正法眼藏

波も引風もつゝあがぬ捨小舟

月さそ夜半のさかりありけり

涅槃妙心

いつもたゞ我ふる里の花あれば

月もかはらす過し春かな

即心即佛

あし鳥やかもめどもまた見へわかぬ

立る波間にうき沈むかき

是れ彼れが教理の一端にして 徹底樂天的向上の詠歌あり
以て彼れが宗教家としての 幾分を推測するに足る
あらむ

要するに彼れは 向上の教理を立て 無上の大法を講し
俗に於ては佛道の大師たり 僧に於ては釋門の導師たり
眞に彼れは三界の大導師として 徳風を布き 禪風を

渠が法爾
永く榮へ
門風長へ
に盛なり

輝かし 佛道の理を説き 道德の鑑とありたりき 高德
聖賢の大宗教家たりしあり 知る可し彼れが法裔永く榮
へ 門風長へに盛ふる事を 五萬の僧尼 六百萬の信徒
は 實に今時我國に於て 彼れの流れを掬み 渠の教理
の下に安神立命の幸福に浴せるに非らずや

晩年と涅槃

雲煙流水 東奔西走 天涯に孤客たる事數年 朝には天
台に往き 暮には南岳に歸り 教化傳法 數十年に亘り
居を移し 錫を轉ずる 數十回 遂に住山を定めてよ

渠は涅槃の地を京
師の白衣取れ
り

り 晩年を傘松の幽處に送れり 而かも渠れは涅槃を京
師の白衣舍に乗れり

臨終の時
遠に基
き八人に
覺を説け
り

渠は建長四年の夏よりして 老の病に兆されけり 定命
五十三は 當に此の年にて有りければ 渠れは 最後の
教誡として 釋迦臨終の所説にあらひ 遺教にきて入
大人覺の大法を説けり
斯くて翌年の秋に至り 自ら無常の風近けりとして 孤雲
禪師を始め 多くの弟子を集め 洞門の大事を委屬し
死後の事まで教悔し 永平寺を 孤雲禪師に譲り 八月
五日に於て 京都へ上りにけり 是は渠れが病の兆ある

八月五日
に京都へ
上れり

渠が弟子
に與へた
る遺歌

一一〇

を聞き 既に寺迄譲りたりと聞きたる 渠れが一族は
療養のみは京都にしくはあしと 切りに上都を促しける
に 波多野義重を始め 後嵯峨の院迄 頻々京都にての
病養を促しければ 流石の彼れも古郷の忘じ難く 遂に
上京の途に就きたりしなり
渠れが旅装を整へ 孤雲禪師、徹通和尚を伴ひて 木
目山に到れる時 徹通和尚を永平寺に還へしたりし時
彼れは無常を歌ふて曰く

草の葉に首途せる身の木の目山

雲に路ある心地さるすれ

俗弟子覺
念の家
に宿れり

醫師の診
断を受け
たり

是れ彼れが暗に遺言として 弟子に與へたる者あらずや
彼れが再び山に歸る能はさりしを 告げたるものあら
すや 渠れの弟子は悲めり 一山の大眾は悲めり 早や
遺歌なるかとして悲めり 人々遺言として悲みけり
而して彼れは孤雲と共に 京都高辻西洞院の俗弟子たる
覺念が家に宿りたるあり 是れ彼れが涅槃に入るの處に
して 眞に渠れは白衣舎に命を終れり 渠れは此に於て
充分なる療養と 満足ある診察をも受けたるあり 俗弟
子の看護 久我一族の見舞太上天皇後嵯峨の院より遣は
されたる 醫師の診察の如きは 最も満足を與へたりき

一一一

されど彼れは宗教家として 僧侶として終焉を在家に
取るの烟せき者やありけむ 且つは又當時後世の物議を
慮かれるにや 或日渠は室内を 經行せし時 前面の柱
に法華經の文字を記して曰く

法華經中
の句

於園中 若於林中 若於樹下 若於僧房 若白衣舍
乃至 當知是處 即是道場 乃至 諸佛於此 轉於
法輪 諸佛於此 而般涅槃」と

是れ豈に渠れが 白衣舍に於て 其終焉を取るの心あら
ずや 在家に於て入般涅槃を遂ぐるの 覺悟からすや
渠は餘命遂に長からず 八月二十八日に於て 渠の辭世

八月廿八
日に於て
掩然入滅
なり

を歌ふて曰く

五十四年 照第一天打箇躡跳 觸破大千嘆 渾身無着
處 活陷黃泉と

書き終りて 掩然入滅せり 溘然として逝けり

一族弟子は更にも言はず 義重、覺念の悲嘆に沈み 孤
雲禪師の氣絶せしが如きは 悲哀の情察す可き者あるを
り而して遺骸を東山に移し 赤築地の地に於て 火葬
したりけり 孤雲禪師は九月六日に舍利を收め 十日於
て永平寺に着し 十二日に入般涅槃の儀式を行ひ 本山
西北隅 傘松の峯に葬り 庵を承陽と名け 孤雲は其の

承陽庵
の骨す

傘松の庵
承陽の庵
百花笑ひ
松風吟じ
彈す琴を

今上天皇
承陽太師
の諡號を
贈られた

側に庵を結び 朝夕供養につとめてけり

鳴呼 傘松の峯 承陽の庵 百花笑ひ 松風吟じ 吉祥

の山 永平の谷 長へに青く 永久に清し 法孫愈繁へ

洞流益廣く 渠れの高徳 渠れが高風は今尙福音を傳

へて息まさる也

實に高徳は天下に普く 聖法長へに輝きて 嘉永五年壬

子 八月二十八日 渠れが六百回忌に於て 先帝孝明天

皇は 敕詔を以て 佛性傳東國師の諡號を贈らせ給ひ

今上陛下は明治十二年十一月に於て 承陽大師の諡號を

贈らせたまひけり

聖僧道元終



傘松道詠 (附録)

(道元所詠)

初雪

長月の紅葉のうへに雪ふりぬ

見る人誰かよとの葉のさき

靈雲見桃花

春風にほろびにけり桃の花

枝葉にのさるうたかひもさし

鏡清雨滴聲

聞くまゝにまた心なき身にしめらば

ちのれかりけり軒の玉水

全

聲つから耳にきまゆる時しれば

我友ならんかたらひそあき

座禪

守るとも思はずなから小山田の

いたつらあらぬかゝしきりけり

全

濁りあき心の水にすむ月は

波もくだけで光とぞなる

全

此よるる天つ空にも花ぞなふ

三世の佛にたてまつらばや

牛過窓櫺

世の中は窓より出る牛の尾の

引ぬにとまる心はかりそ

即心即佛

おしどりやかもめともまた見へわかぬ

立る波間にうき沈むかき

應無所住而生其心

水鳥のゆくもかへるも跡たえて

されども道はわすれさりけり

無常

朝日まつ草葉の露のほとなきに

いそぎ立そのへの秋風

全

世の中は何にたどへん水鳥の

はしふる露にやどる月影

中秋

また見んとおもひし時の秋だにも

今宵の月ぞぬられやはする

夢中説夢

本来もみな偽のつくも髪

あもひ亂るゝ夢をあそどけ

十二時中石空過

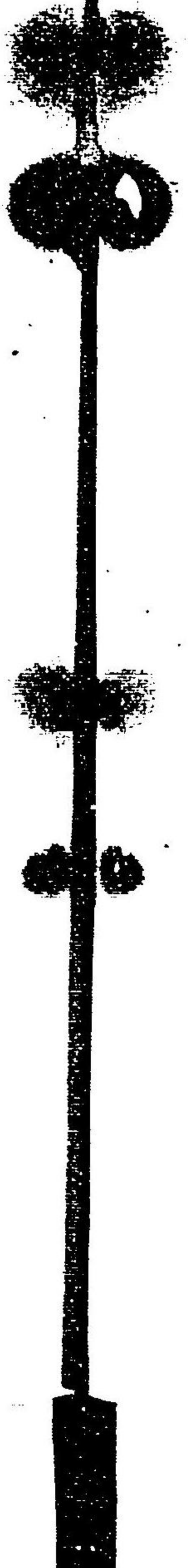
過來つる四十あまりは大空の

うさぎからすの道にぞありける

全

唯とても日影の駒は嫌はぬを

法の道うる人ぞすくあま



詠法華經

夜もすから終日にあす法の道

みち此經の聲とあゝると

全

溪の響嶺に鳴く猿たえくゝに

たゝ此經をとくとあそまけ

全

此經の心を得れば世の中の

うりかふ聲も法をとくかは

全

四つの馬三つの車にのらぬ人

誠の道をいかてしらすし

不立文字

いひ捨しるの言の葉の外あれば

筆にも跡をとらめさうけり

教外別傳

あら磯の波もえよせぬ高岩に

かきもつくへきのりあらばさう

正法眼藏

波も引風もつかかぬ捨小舟

月あそ夜半のさかりありけり

涅槃妙心

いづもたゞ我ふる里の花なれば

色もかはらす過し春かき

盡十方界眞實人体

世の中にまことの人やなるらん

かきりも見えぬ大空の色

父母所生身即修大覺位

尋ね入る深山の奥のさとぞもど

我すみおれし都ありけり

佛教

あらずとふと七の佛の古言を

學ふに六の道を超へけり

全

嬉しくも釋迦の御法にあふひ草

かけても外の道をふまめや

禮拜

冬草もみへぬ雪野のうらさまは

おのが姿に身をかくしけり

五濁

底清きわか谷川の末をうけて

心の水のあとにあららん

全

はちすばのにありにしまぬ心もて

なにかは露を玉と欺く

愛別離

たらちめやとまりて我を思はまし

かはるにかはる命ありせば

全

よひの間にほのかに人をみか月の

あかて入にし影ぞ戀しき

病

はかあしあかしらの雪は消果て

たまくのこる露の吾身は

死

さりども八重の汐路に入しかど

そあにも老の波はたちけり

六塵

風の上にありか定めぬちりの身は

行術もしらす成ぬへらあり

全

此まゝにすまはすむへき山水よ

浮世の塵ににおらすもがな

山寺

世をそむく所どかきくちく山は

物思ふにそ入へかりけり

寺

宿を出は尋ぬてゆかん清水寺

名にたかはすば住やとまると

達摩

さとり行心の内にすむ月は

出てゝ入べき山の端もさし

般若

水の月かたみの影のむさしきを

かさねてたどる御法ありけり

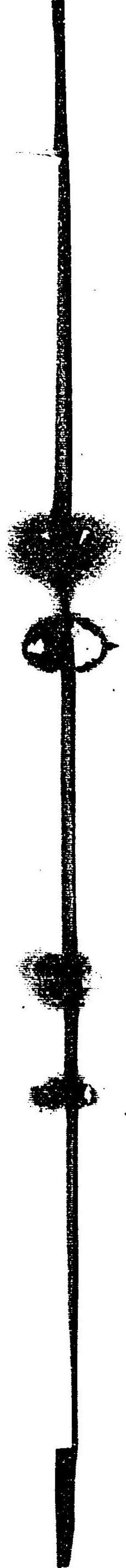
大圓鏡智

曇りあくみかきあらはす悟りあそ

まあとにすめる鏡ありけり

座禪

頂に鵲の巢やつくるらん



全

肩にかゝれるとゝかたの糸

○なにとかは月やあかぬとたどるゝま

我もとのみを思ひしりまは

草庵雑詠

○とゞまらぬ日影の駒や行すまに

のりの道うる人ぞすくまは

○なまゝとどる夏のはしめの祈には

廣瀬龍田の祭をさする

○草の庵に立ても居ても祈る事

我より先に人をねたさむ

○あろかなる心ひとつの行末を

六の道とや人のふむらん

○山深み峯にも尾にも聲たてゝ

けふもくれぬと日ぐらしさきく

○草の庵にねてもさめてもまをすさと

南無釋牟尼佛あれひ玉へ

○我庵は越のしらやま冬ぶもり

凍も雪も雲かゝりけり

○夏冬のさかひもねかぬ越の山

降るしら雪もある雷も

○梓弓春の嵐に咲きぬらむ

峰にも尾にも花匂ひけり

○あし引の山鳥の尾の長き夜の

やみぢへたてゝくらしげるかな

○頼みあし昔あるしやゆふたすさ

あはれをかけよ麻の袖にも

○梓弓はるくれはつるけふの日を

引どゝめつゝをしみもやらむ

○徒に過す月日はおはかれど

道をもとむる時うすくなき

○草の庵夏のはしめのおろもかへ

すゝきすたれのかゝるはかりぞ

○心とて人に見すべき色そなき

たゞ露霜のむすふのみして

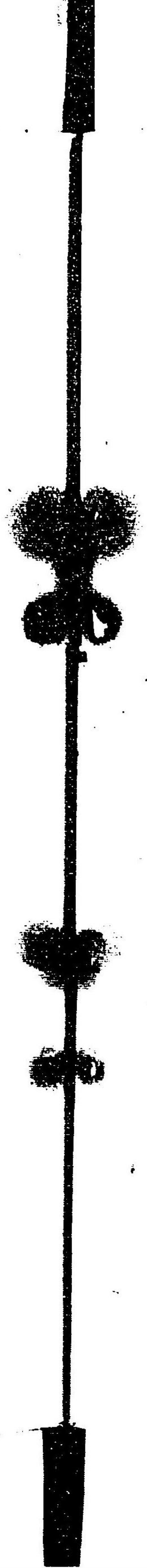
○いかなるか佛といひて人といへ

かひやかもめもどにつゝくにいにけり

○をやみかく雪はふりけり谷の戸に

春來にけりと鶯そあく

○六の道遠近まよふともからは



我父そかし我母ぞかし

○賤の男の垣ねに春の立しより

吉野に生る若菜をぞつむ

○大空に心の月をなかむるも

やみにまよひて色そめてけり

○春風に我あとの葉のちりけるを

花の歌とや人の見るらん

○思ふる我は佛にちらずとも

衆生を渡す僧の身ならん

○山のはのほのめくよひの月影に

光もろすくどぶ瑩かき

花紅葉冬の白雪見しあとも

おもへは悔し色にめてけり

木の目山にて

草の葉にかどでせる身の木の目山

雲に路ある心地よろすれ

傘松道詠終

明治卅三年四月十五日印刷
全 卅三年四月廿一日發行

定價金二十錢

著作
所有

著者 野崎次郎

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 大月隆

東京市神田區錦町二丁目十番地

印刷者 池田良藏

東京市神田區錦町二丁目三番地

印刷所 知足堂

東京市神田區錦町二丁目三番地

發兌元

東京市神田區錦町一丁目十番地

文學同志會

●文學同志會出版書籍目錄●

大坂備後町四丁目

盛文館

東京神田區雉子町

山本錄藏

東京々弓橋町

松村三松堂

美

妙

定價二十錢
郵稅二錢

春は花夏は螢秋の虫の聲冬の雪是等を始めとして人生の美貌鳥獸の
艶ある事及び音響より來る美如何に人生に快樂を與ふる賜なるか本
書を繙くときは幽谷の鰐魚又飛鳥の妙美あり

文學の調和

定價二十五錢
郵稅四錢

國異れば各々異りたる所の事情あり異なる事情より各々殊別の文學を

生む是れ一般の通理なり然し深く深究し來れば皆一に歸するものなり
 本書は各國文學の異なる處を示し長短の意見を示し如何にして其調
 和均一の點に達すへきかを詳論せり

人生の目的

定價 二十五錢
 郵税 四錢

●第一章緒論 ●第二章飲食主義 ●第三章勤勞主義 ●第四章競爭主義
 ●第五章知識主義 ●第六章良心主義 ●第七章忠孝主義 ●第八章幸福
 釋義 ●第九章自愛主義 ●第十章他愛主義 ●第十一章兼愛主義 ●第十
 二章保存主義 ●第十三章飲食主義 ●第十四章勤勞主義 ●第十五章
 第十五章競爭主義 ●第十六章知識主義 ●第十七章良心主義 ●第十八
 ●第十八章忠孝主義 ●第十九章自愛主義 ●第二十章他愛主義 ●第二
 義批評 ●第二十一章兼愛主義 ●第二十二章保存主義 ●第二十三
 義批評 ●第二十三章結論

人生の老旅

定價 二十錢
 郵税 四錢

世に不幸の人多しと雖も己のが涙の洩し場なき人はと苦痛の人はあ

らざるべし人生の老旅は是等の人の情友となり人なき處に於て深く
 兄弟に同情を表し其煩悶を慰むべし
 本書は人生の初旅の後篇なり初旅を讀む人は必ず後篇を讀まざるべ
 からず

婦人實務錄

定價 十六錢
 郵税 二錢

此書は議論にあらす婦人の實際毎日心得ざるを得ざるを教訓心得方
 針を信切に説き苟も婦人として心得ざるを得ざる案内書也

人生の初旅

定價 二十錢
 郵税 四錢

人の一生中には如何なる事が起るか如何に歩まざる可からざるか如
 何にせば立身すべきか如何なる人が失敗せしか本書は未開映絶の實
 行録なり詩文あり散文あり小説あり議論あり先づ一生涯の記録と思
 ふて可なり

家の寶全

定價 三十錢
 郵税 六錢

本書は文學會の方針とする家制部發表の書にして各専門大家の家制意見及び家に起る萬般の事業方法を致へ且項目として五百有餘あり廿八年初版を起し今廿三版を重ね部數二十七万部を發賣せる書なり手にもりて其價額を知れ始は二冊なりしが今は合本なり

馬琴妙文集

定價 二十錢
郵稅 四錢

詩文散文序文末文碑文箴文戲曲座右銘等馬琴全著述中の粹を集めたるもなり

立身事蹟

定價 二十錢
郵稅 四錢

世には失策を以て充たせり失策せぬ先に失策に陥らざる方法を講ずるは立身の急務なるべく古今の聖賢と座右に立談し彼等が失策と成効の事蹟を尋ぬ本書を友とするもの立身せざんと欲するも豈得べけんや

山高水長

定價 二十錢
郵稅 四錢

語らんと欲する事を語らずして人に知らしめ言はんと欲する事を口に明かに言はずして其言聲の美を知らしむ是れ新体詩の特色なりとす坐ながら天地の怪美を味はんと欲するものは山高水長の傍に來れ

斷巖絕壁

定價 三十錢
郵稅 四錢

文天祥正氣の歌を始めとして和漢の文粹を集めたるものにして今回本會に於て出版せり盛夏綠蔭の下本書を繙かば心神自ら清涼に浴するの感あらん

人生の氣力

定價 廿五錢
郵稅 四錢

船舶波を犯して走るは蒸力の勢力あるを以てなり社會の迫害を排して能く身の全安を圖らんとせば須らく吞海の氣力は養はざるへからず本書は即ち吾人の蒸氣力也

吾人之生活

定價 卅五錢
郵稅 四錢

本書は文明の生活なり内地雜居後の生活なり日本人としては文明的
 社交を知らんと欲せは本書の他に其友なし

六

風月萬象

定價三十五錢
 郵稅六錢

松風吟月

定價三十錢
 郵稅六錢

人生の片影

定價二十錢
 郵稅二錢

鴨長明海道記

定價十五錢

廻國雜記

定價二十錢

人生の悔悟

定價二十錢
 郵稅四錢

●父母に別れし悔悟●都會の婚入りをせし悔悟●學問を學びし悔悟●物を
 輕信せし悔悟●都會の飲食物●人を信用せし悔悟●正直の悔悟●交
 際を擴めし悔悟●望の悔悟●一期の失望●二期の失望●三期の失望
 ●四期の失望●都會にありし人の悔悟●富家に生れし人の悔悟●時
 間を徒費せし悔悟●物に溺れし悔悟●喫煙を始めし悔悟●身を虛弱
 にせし悔悟

禪學斷片

定價二十錢
 郵稅四錢

艷麗文粹

定價二十錢
 郵稅四錢

万情万眉

定價二十五錢
 郵稅四錢

七

特約大賣捌所

水戸	名古屋	靜岡	濱松	大津	秋田	廣島	丸龜	松江	佐賀	熊本	博多	久留米	鹿兒島
市毛	川瀬	内田	谷島	古川	成見	清水	鹽田	向井	大坪	芹川	森岡	菊竹	吉田
淺太郎	代助	仙藏	屋	伊助	兵衛	三郎	書店	次郎	萬六	書店	書店	書店	幸兵衛
仙臺	弘前	沼津	掛川	京都	姫路	岡山	諏訪	高松	馬關	佐賀	熊本	大分	長崎
有千	今泉	文林	三原	河合	木村	竹內	日新	龜友	上山	河内	中山	甲斐	安中
關	書	屋	堂	港	治	彌三	堂	堂	書	庄	知新	治平	半三郎

東	服部	旭	松江	文海	川又	勉強	品川	奧村	真海	白鳥	木文
京	書	堂	堂	堂	藏	堂	太左衛門	市右衛門	書	書	書店
堂	店	堂	堂	堂	藏	堂	太左衛門	市右衛門	書	書	書店
北隆館	栗原	山口	武藏	關西	林平	中西	山上	清光	安中	振々	岩下
合資會社	書店	書店	屋	株式會社	次郎	屋	宗兵衛	堂	集榮堂	々	袈裟吉
東海	福島	寶永	田中	奈良	青野	室支	清明	柿村	一二	川岡	伊藤
合資會社	島屋	館	書店	株式會社	書店	支店	明堂	書店	二堂	清助	小文可

神速廉價ハ弊店ノ抱負

謹告

滿天下ノ貴紳、淑女、益消榮國家ノ大慶、何ゾ之
 レニ如カムヤ、弊舖斯業ニ從事スルヤ、日尙淺キ
 ニモ拘ラス、日ニ進ミ月ニ歩ミ、愈益盛運ニ赴ク
 一ヲ得ルハ、是レ全ク江湖諸彦ノ賜ニシテ、弊舖
 ノ深ク謝スル所ナリ、想フニ國運ノ進步ハ種々ノ
 原因アリト雖モ、學事ニ基因スルニ非ズンバ能ハ
 ズ、故ヲ以テ弊舖ハ今ヨリ一層正實、勉強、以テ
 神速ト廉價トヲ旨トシ、大方諸君子ノ貴需ニ應ゼ
 ムトス、是レ國利民福ヲ圖ルノ一端ナリト、弊舖
 ノ自負スル所ナリ、庶幾ハ倍舊一層ノ愛顧ヲ垂レ
 タマヘヨ、

全盛福小柏福高松浦千金山長臺
 岡島諸原井岡本和葉口澤岡北

木文書閣店
 鶴鳴助
 鈴木萬
 廣文吉堂
 中井正
 日新館
 學海堂
 水琴堂
 文華堂
 立真社
 桂梅吉
 宇都宮源平
 目黒十郎
 博文堂

一ノ關
 青森
 須賀川
 長野
 羽後
 德島
 甲府
 諏訪
 熊谷
 高田
 富山
 和歌山
 文港
 鎌田政憲
 寶來屋
 西澤喜太郎
 大澤堅次
 黑崎書店
 柳生堂
 日藤書店
 伊藤書店
 高橋書店
 小林清眞堂
 津田源兵衛

神速廉價ハ弊店ノ抱負

謹告

滿天下ノ貴紳、淑女、益清榮國家ノ大慶、何ゾ之レニ如カムヤ、弊舖斯業ニ從事スルヤ、日尙淺キニモ拘ラス、日ニ進ミ月ニ歩ミ、愈益盛運ニ赴クコトヲ得ルハ、是レ全ク江湖諸彦ノ賜ニシテ、弊舖ノ深ク謝スル所ナリ、想フニ國運ノ進步ハ種々ノ原因アリト雖モ、學事ニ基因スルニ非ズンバ能ハズ、故ヲ以テ弊舖ハ今ヨリ一層正實、勉強、以テ神速ト廉價トヲ旨トシ、大方諸君子ノ貴需ニ應ビムトス、是レ國利民福ヲ圖ルノ一端ナリト、弊舖ノ自負スル所ナリ、庶幾ハ倍舊一層ノ愛顧ヲ望レタマヘヨ、

全盛島岡 小福諸島 柏原 福井 高岡 松本 浦和 千代田 金山 長岡 臺北

木文閣店 鶴鳴書 鈴木萬 廣文吉 中井正 日新館 學海堂 水琴堂 文華堂 立真社 桂梅吉 宇都宮源 目黒十郎 博文堂

一ノ關 青森 須賀川 長野 羽後 德島 甲府 諏訪 熊谷 高田 富山 和歌山

文港憲堂 鎌田政 寶來屋 西澤太郎 大澤堅次 黑崎書店 柳生堂 日藤進堂 伊藤書店 高橋書店 小林清眞堂 津田源兵衛

〔要〕 官 弊店出版の書籍は勿論内外各書局出版の圖書をも極めて廉價に販賣仕候

〔書 目〕 弊店發賣書籍目録は郵券貳錢御送附の御方へ御郵送可申上候

〔御問合〕 書籍代價等御問合の節は往復はがき又は郵券御送附被下候へば早速委細御報知可仕候

〔御注文〕 總て前金を以て御注文奉願候若前金御送附無之ときは御發送不仕候

〔御遞送〕 總て御注文次第即刻に御遞送可仕候

〔遞送費〕 若し運賃等を要したるときは書籍代價の外別に是等の費用可受申候但市内の御注文は無遞送料にて御届可申上候

〔荷 造〕 精々注意致堅固に荷造調製可仕候若萬一途中にて破損紛失等の損害出來候とも弊店は一切其責に任不申候

〔御送金〕 代金等御送附は左項の内御便宜に任せ何れにても不苦御座候

一郵便爲替(神田淡路町支店宛に限る) 一銀行手形(東京市内の銀行宛に限る) 一郵便貨幣早速便(配達料済に限る) 一郵便代用(一割増に限る)

〔御割引〕 一時に數部御購求の節は部數に従ひ相當の御割引可仕候間何卒澤山御購入の程旨に奉希望候

〔御注意〕 總て幸便無之限は圖書代價及遞送料に對する領收證は別に御送呈不仕候候間圖書の到達を以て其證を御見做被下度候但し領收證御入用の節は別に郵券三錢又は端舟御送附被下度奉願上候

岡崎屋書店發行書籍目録

● 陸軍大學校教授「マスター、オブ、アーツ」山口造酒先生親筆

實用英和書簡文

大增補 洋裝美本 全壹冊
第三版 定價金 五拾錢
郵税金 六錢

世英文書翰學脩に便あるの良書少なし弊店是に於て先生に請ふに此種の著わらんを以てす先生幸に諾せられ敢て急精を採粹を集め此を求めす歳を累ぬる數年參考せられし書數十冊を以て言說明甚懇切に良書を見る材料の豊富を要せず其說明甚懇切に實用英和書簡文空前絶後を博し初版日ならずして盡く再版の名に背かざる 亦盡く茲に英和書翰文要三千餘言を附し大增補を加へて第三版を發行するに至れり荷も英文書翰學脩の必要を感ずるの諸君は必ず一本を求めて座右に備へ以て本書の眞價を味はひ給へ

● 正直は成功の基礎

●岡崎屋は正直を以てす

三

○「マスター、オブ、アーツ」片山 潜先生著

英和商用文範

再版

洋装美本 全壹冊
定價 金參拾五錢
郵税金 六錢

今や我外貿易盛大に赴きを以てするに際し外國人間に用ふる商業文範を悉知せざる可からず本書は主として商業上の事項に關する文例を集めて之れが解を施し或は難解のものには之れを註釋し習慣的のものには特別に注意を精確にし懇切をきり去れば讀者は容易に商業文加へられたるものと精確にして懇切を認め得るに至るは明かあり苟くも商業に志あるものは必ず一讀せざる可からざる好著あり

●アンダーソン氏著

實用商業文

英文 翻刻

洋装美本 全壹冊
定價 金壹圓
郵税金 八錢

F. W. ANDERSON'S MERCANTILE LETTERS.

世間英文商業書翰に關するの書多しと雖も就中商業文に關する一切の事項を網羅して洩らざるは氏の著書を以て完璧とあすべし弊店是を以て本書を翻刻して校正し最も注意したれば一字の誤植ありし實業界諸君の必携必讀すべき良書なり

●シムモンド氏著

商業書翰文

英文 翻刻

洋装美本 全壹冊
定價 金參拾五錢
郵税金 六錢

MRS. P. L. SIMMONDS'S THE COMMERCIAL LETTER WRITER.

英米諸國の出版に係る商業書翰文の數は實に多しと雖も就中本邦の如きは尤も適切なる書にして商業界にあるものは寸時も離す可からざる良書あることは泰西既に定計あり弊店此に於て本書を翻刻し些か我商業界に貢献せんと欲す苟くも商業に志すの諸賢は一本を購ひ弊店の虚を語らざるを證し賜へ(誤字あり)

●イムブリー氏著

英語學楷梯

十三版

洋装美本 全壹冊
定價 金四拾錢
郵税金 八錢

MRS. W. IMBRIE'S ENGLISH-JAPANESE ETYMOLOGY.

方今英和會話篇の出版日に月に其數を増し殆んど底止する所を知らざるが如し然れ共學修するに尤も宜しく應用に尤も便なる者は諸君の出版せらるゝと共益々其力を増すに至る本書の如きは出版以來版を重ねること十三以て本書か如何に適切なるやを知るに足る可し此書世間自ら定論あり又敢て贅するを要せざる可し苟くも會話術に長せんとする諸君は必ず一讀し再讀せざる可からざる一大良書なり

●勉強は幸福の母

三

●岡崎屋は勉強の好模範
●英人ブラウン氏校閲

四國新會話

第四版

洋裝美本全壹冊
定價金貳拾五錢
郵税金四錢

外語を談するの要は味々するを要せず然れども又單に一外國語のみ
に通ずればどて決して充分なりと云ふ可からず少くも今日世界に勢
力を有する一國の語に通せざる可からず本書は之れが爲めに出版せし
ものにて英、佛、獨、和四國對譯の會話集あり此書極めて平易を旨とし
且日常の談話を集めたるものにして三十八個の場合に於る談話を網羅
せるものあり故に本書を精讀し能く應用し得るものは如何なる處にも
其だし不便を感じることもあかる可し會話を學ばんとする初學者諸君
は本書より入るを以て最も捷徑とすれば陸續購求せられよ
●元木貞雄先生著

和文英譯捷徑

再版

洋裝美本全壹冊
定價金貳拾五錢
郵税金四錢

方今和文英譯の必要を感じる者益大あり而して世間之れを教示する
の書少し弊店是に於て本書を發刊せり先づ冠詞、助詞、接續法、
前置詞及接續詞の用法を詳述し次に通常略り易き誤凡三百の場合を指
し最に英文對照例を凡六百個を蒐集せり蓋し本書は初學者及
ひ受驗者諸君を利すること甚だ大あるべし

●酒卷貞一郎先生著

會話文法

訂正再版

洋裝美本全貳冊
定價金七拾錢
郵税金拾貳錢

正しく書き正しく談せんと欲せば先づ其根本を究めざる可からず本書
は説明を簡明ならしめ務めて懇切を旨とし明瞭然ある文法上の智識
を興ふることを務め以て普通に陥り易き誤謬を指らしめ自然に正しく
書き且つ談せしめんことを期せり且英文法中至難と稱せらるる動詞の
如き精細に説明せるを以て一讀其用法に通じ應用に便あらしむ之れを
以て苟くも正しく談じ正しく書かんことを欲するの諸君に向つては特
に適切ある好著なり
●井上歌郎先生著

英文和譯例題集

再版

洋裝美本全壹冊
定價金貳拾五錢
郵税金四錢

本書は應用汎博、趣味豊富なる英文六百個を拾集して之れに流暢、精確
ある譯文を附したる者にして巻尾に動詞の用法を詳述せり英文に志す
の士幸に一讀せば裨益する所甚だ大あるべく殊に受驗者諸君には必要
歟可からざるの書にして若し本書を熟讀せらるれば試験の合格は弊
舖の確證する所なり
●延引は時間の賊

●岡崎屋は時間を厳守す
陸軍大學校教授「マスター、オブ、アーツ」山口造酒先生編

獨逸語獨修

第四版
洋裝小本 全壹冊
定價 金貳拾五錢
郵税金 四錢

今や獨逸語研究の要用なるは贅言を要せずして明かあり而て之を獨修するの書少し是に於て編者の學識及び多年之れか教授の任に當られたる經驗を以て此書を編述せられたり其軀載を紹介せんに發音法の一平易より説きし重要なる單語を列舉し又其次に必要なる語句を集め兼てば獨逸語の門に入らんとする諸君は必ず一本を備へ以て机上の良師とすの要なるべし
●華女學校教官「マスター、オブ、アーツ」山口造酒先生編

佛蘭西語獨修

新刊
洋裝小本 全壹冊
定價 金貳拾五錢
郵税金 四錢

今や國際の關係は親しく外人との交際の益密ならんとするに當り實際關係及交際場裡に於て用ゐらるる佛蘭西語の研究は一日も忽せにもすべからざるあり本書は先づ發音法より説起し重要なる單語を列舉し必要なる語句を集め平易なる談話を示し文法の一冊を説いて巻を結び専ら官用語並普通交際用語を漏さざらんことに勉められたれば初學者諸君並遠師あるの地に於る諸君が獨修せらるるに至便ある良書あり且つ巻尾に兵語數百個を附せられたれば軍事に志す諸君の必讀すべきものあり

●シエクスピヤ氏著 デイトン氏註釋

マクベス

英文
洋裝美本 全壹冊
定價 金參拾五錢
郵税金 六錢

MR. SHAKESPEARES MACBETH

沙翁の著作は生命あり活氣あり常に劇場に演ぜられ又常に講堂に講せらるる實に沙翁は今日泰西劇界の指南中なり弊店「マクベス」の曲を翻刻せり本書の如きは翁の傑作中の傑作にして苟くも英文學に志ある諸君の清座熟讀せざる可らざるの書なり(誤字あり)

●カーライル氏著

英雄崇拜論

英文
洋裝美本 全壹冊
定價 金四拾錢
郵税金 六錢

CARLYLE'S HEROES AND HERO WORSHIP.

「カーライル」氏は英文學史上有数の人士あり其文體は一種の特色を有し思想奇抜にして恰も別天地にあるか如く感ありと評せられ其著多しと雖も本書は蓋し其最たるものあり弊店等相謀り翻刻して以て貴客を充たさんとせり特に校正に注意を加へたれば誤植等の虞なし

●暴利の商業の本旨に非ず

●岡崎屋は無類廉價に販賣す

八

●ドイツケンス氏著

クリスマス、カロール
及チャイムス

英文
翻刻

洋装美本全壹冊
定價金四拾錢
郵税金六錢

MR. C. DICKENS'S A CHRISTMAS CAROL & THE CHIMES.

「ドイツケンス」氏は當時の小説界に於ける一大名士にして其行文の妙麗ある其着想の深妙ある優に一端地を抜くに足る一度巻を開かんか讀了する迄は決して止むと能はざるは氏か著書の特色なり本書は氏の著作中の傑作にして西洋小説の妙を味ひ深く其粹を探らんと欲する諸君は必ず本書を繕き英語を教授する諸校皆之れを學修す(誤字あり) ●シエクスピヤ氏著ドイツケンス氏註釋

人肉質入裁判

英文
翻刻

洋装美本全壹冊
定價金參拾五錢
郵税金四錢

MR. SHAKESPEARES THE MERCHANT OF VENICE.

本書は沙翁か喜曲の一にして尤も人口に膾炙し又屢々演せらるゝものあり「ドイツケンス」氏は其解の字句文意を懇切に註釋せられ同書註釋中又尤も細密精確なるものとして有名あり(誤植あり)

●バーチット女史著

小公子

英文
翻刻

上製石版詩入全壹冊
定價金壹圓貳拾五錢
郵税金拾錢
並製全壹冊定價金七拾五錢 郵税金八錢

LITTLE LORD FAUNTLEROY BY MRS. F. H. BURNETT.

女史の名は泰西文壇に鳴る本書は其一傑作にして偏屈極まる侯伯も顯悟ある小公子か無邪氣の所作の爲めに遂に順化するの人情を寫し得て極めて妙あり筆端水流の如く輕爽にして平滑に事實も亦甚た面白く一たび本書を手には愈讀んで愈佳境に入り讀了るまで巻を置く能はざらしむ蓋し本書は消閑の好友たるべく又英文の智識を増さしむべく殊に師範學校中學校又女學校等の教科書として最も適當なる良書あり(誤字あり) ●文學士松本幸次郎先生講述

普通心理學講義

三版

洋装美本全壹冊
定價金七拾錢
郵税金八錢

本書は先生が會て講習會に於て講述せられたる筆記を請ふて出版せる者にして組織の新なる材料の豊富ある讀者をして興味津津たるの感あらしむ蓋し新心理學の發達とその學說の概要を我が教育界に紹介するを目的と交ふるに先生の意見を以てしたる者にして明瞭な心理學の全般を説明せる者あり心理學に志す者は必ず一讀すへき良書なり ●神速廉價は文明商業の本旨

●岡崎屋は神速廉價を抱負とす

十

●工學博士野呂景義君校閱、工學士香村小鎌君、全今泉嘉一郎君合著
鑛山測量術 三版
洋綴美本 全壹冊
定價金壹圓貳拾錢
郵税金 八錢

鑛山測量術は礦業上必須の業務にして探鑛採鑛等に關する方針を定むるには必ず之れに依らざる可からず本書は科學的智識に基き實際問題に於る萬般の疑惑を解き秩序整然説明を瞭、所説精確初學者と雖も容易に解得し得可く不注意より生ずる一種の災害を防がしむるを務むるも斯道に従事する諸君は寸時も離すべからざる一大良書なり

●農商務大臣大石正己君序、文學士高田早苗君校閱、宮館貞一君著

縮盟 新條約釋義 訂正 再版
洋裝美本 全壹冊
定價金 五拾錢
郵税金 六錢

●多年我國民の熱望し、新條約は實施せられたり而て新條約の本義を講究して内外人の權利義務を知るは今日の大大の急務なり本書は新條約に就て歐米各國の實例を参照し學理的に明晰周到の釋義を下し條約と新條約の歴史を掲げ比較して其の利害得失を論究し加ふるに關係公文を以てせり江湖の志士幸に愛讀の榮を賜へ

●法政協會編纂

縮盟 新條約正文 附關係公文
洋裝美本 全壹冊
定價金 參拾五錢
郵税金 四錢

●本書は日英、日獨、日露、日佛、日米、日清、六大國其他十有餘國の新條約文を蒐集して洩らさず加ふるに關係公文を掲げたるものあり江湖の士人幸ひに一書を求めて座右に備へられよ

●司法大臣清浦奎吾君題字、辯護士會々頭磯部四郎君序、辯護士會副會頭藤澤治君、明治法律學校々友内田晴耕君合著、

改 府縣制郡制釋義 增訂 再版
洋裝美本 全壹冊
定價金 八拾錢
郵税金 拾錢

●兼て中央狀師界に録々の聞へある兩君先づ筆を中央行政の區別に起され各條を逐て説明解釋論等の到らざるは亦く又新熟語には之が説明を加へ難字には假字を附し文章は専ら平易を主とせられたり其議論の明確説りの懇到あるは敢て言を用かずして明に學理と實例を網羅して餘す所あらずは本書の特色あり請ふ一本を求めて新法の精神を解得し給はんことを、世間同名の書あり幸に混すると勿れ

●樂篇は今古の美德

十一

●岡崎屋は懇懇あり來て試みよ
●松伯樓主人 平瀬龍吉先生著

十三

青年 成業 策

再版

洋裝美本 全壹冊
定價 金貳拾五錢
郵稅 金四錢

教育は弛み家庭は亂れ宗教は頹れ偉人の感化も亦容易く望むべからざるの今日に於て著者が高尚深遠なる思想と流暢輕快なる筆とを以て先づ家庭に於ける兒童を論じ教育と感化とを主眼として喬々偉大なる人物を評論し現時我國幼年教育の困難を痛論して巻を結ひ世人の惰眠を驚醒せんとを期せられたる實に本書は二十世紀の滿溢たる希望の順風に乗せんとせらるる天下幾多の青年諸君が精神的修養の最良師あり歸館は此裨益ある書を紹介すると然り請ふ必ず一本を求めて其眞價を知り給へ

●叻鹿庵主人著

側

面

觀

再版

洋裝小本 全壹冊
定價 金貳拾錢
郵稅 金四錢

附錄 道臣之墳墓

本書は叻鹿庵主人が高尙脫俗の幻想と輕快奇抜の筆とを以て人世を側面より觀察し順序を設けず當るに任せ出づるに在り一々大々的筆鋒を試みられ附録には明智光秀の成果を論せられたる消閑の良友とあすに足るへし

●蘇國「エヂンバラ」大學教授ゼー・エヌ・ブラツキ一氏原著
米國博士イーストレーキ氏序文、日本永田留六郎先生譯述

自

修

論

新刊

洋裝美本 全壹冊
定價 金貳拾錢
郵稅 金四錢

凡る人物たらんと欲すれば必ず自ら脩めざるべからず本書は編を分ちて三とあし先づ知力の養成を論じ次に體力の練習を述べ最後に海陸の修養を説いて巻を結ばれたり著者最も筆を徳義の脩養に勉めらる所説高尚嶄新意味深長にして言外に溢る成業策と共に青年諸君必讀の書あり

●海軍少將肝付兼行君題詞、陸軍中佐齊藤進一郎君序文、山川直信君著

海 之 偉 人

再版

洋裝美本 全壹冊
定價 金貳拾錢
郵稅 金四錢

海の偉人とは誰ぞ謂はずして其海傑「ナルソン」大將たるを知る流暢雄勁の筆を以て或は電光石火の壯觀を描き或は裂肉粉骨の慘狀を寫し讀者をして覺へず魂飛び氣揚り案を叩て快哉を呼ばしむ海國の男兒たる者請ふ一本を購めて本書の眞價を知り給へよ

●改良は發達の階梯

十三

岡崎屋は日に改良を加ふ

十組

伯耆佐野常良君序 前田正名君演述

前田正名君

鐵鞋之響

洋裝美本全壹冊
定價金參拾錢
郵税金六錢

産業の發達國運の勃興に伴はずんば何を以て我國光を顯揚し我國威を振張するを得んや前田正名君多年實業界の爲め東奔西馳の勞に當り國力充實の經營に忙し足跡今や天下に周ねく實踐躬行其目的漸く行はれんとす鐵鞋三寸其響鐘として國民の耳朶に徹す矣坐右固より此書を欠くべきにあらず何ぞ實業家と否とを問はん此書實に血涙を以て墨を磨したるもの苟も國家的觀念を有するの士速に購讀一番せんとを

●關貢米先生編

和漢文學 佳句類選

第七版

洋裝小本全壹冊
定價金貳拾錢
郵税金四錢

和漢今古の名文諸書に涉履し興味ある美文佳句を採萃して一卷とあし部門を分ちて四季、風景、人事、愛情、人品及雜語とし金言數句を集め作文の好資料をあせるもの發行後日ならずして版を重ねると七度以て其有用あるを知るべし

